ホテル東光園本館

鳥取県米子市

ほてるとうこうえんほんかん

ホテル東光園正面外観

東光園本館は、山陰地方における建築家菊竹清訓氏の代表作の一つとして、1964（昭和39）年に竣工した。この建築の特徴は、６本の組柱によって、高く持ち上げられた大梁から２枚の客室階の床を吊るという主構造にあり、世界的にこれが初にして最後と言われる建築様式（二段ピロティー形式）を用いている。主柱、貫、添柱という厳島神社の鳥居にみられる木造建築の架構をコンクリートで大胆に表現している。ガラスの階段室や最上階のスカイルームの十字架構とＨＰシェル屋根など見所満載である。皆生温泉は、山陰の三名湯の一つでもあるため、源泉かけ流し湯や四季折々の山海の美味を楽しむ事も出来る。文化財に宿泊できる宿として数少ない宿泊施設である。

【ロビー】
全面ガラス張りのロビーの窓から見えるのは世界的彫刻家流政之氏が作庭した3000坪の広さを誇る日本庭園である。

見どころ

昔、出雲大社にお参りする時、皆生の中でも東光園にしかない「よみがえりの水」で体を清め、また三杯飲水することにより、今までの邪念を浄化し、魂をよみがえらせた、という言い伝えが受け継がれている。その言い伝えにより、東光園は「出雲大社」をモチーフにして設計されている。地面から６階の上にかけられた巨大な梁をフロント正面ロビーの真ん中に位置する柱で支え、その巨大な梁から５階、６階の床が吊るされている。正面より東光園に入ると視線はガラスの向こうに広がる庭園へ釘付けとなる。実は１階もピロティになっている。

客室は畳敷きの落ち着きのある和室。窓外には霊峰大山と、見事な庭園が広がる。

日本の様式美と西洋の機能美が心地よくとけあう寛ぎの空間となっている。

天皇・皇后両陛下をはじめ皇室の方々が幾度となくご宿泊になった貴賓室があり、また広大な日本庭園の一角に数寄屋造りの離れの間が、昔ながらの姿で佇んでいる。本館に限りお気軽に見学にお越し下さいとのこと。宿泊は伝統の日本建築が語りかける和の心に包まれ、非日常を堪能されてはいかがだろうか？

【東光園七庭】
芸術家の研ぎ澄まされた感性が、惜しみなくそそぎ込まれた日本庭園。その美しい光景は、粋を知る日本の心そのものである。

【空中庭園】
４階にあたる部分を正面から眺めると建物にぽっかり穴が開いたように見えるこの異質な空間が「空中庭園」である。

【スカイルーム】
７階、全面ガラス張りのスカイルームからは大山、日本海、米子の町が一望できる。

【ギャラリー】
１階ギャラリーには東光園の構造など良く分かる模型や資料が展示されているが、東光園はその建物自体が美術館となっているともいえる。

建物名称	ホテル東光園本館「天台」
建築年	1964（昭和39）年
構造・様式	ＳＲＣ造吊り下げ構造　地上七階、地下一階
所在地	鳥取県米子市皆生温泉3-17-7
電話	0859-34-1111
ＨＰ	http://www.toukouen.com
開館時間	米子鬼太郎空港よりタクシー、車で約30分
アクセス	ＪＲ米子駅よりタクシー、バスで約20分
備考	国登録有形文化財

塩谷定好写真記念館

しおたにていこうしゃしんきねんかん

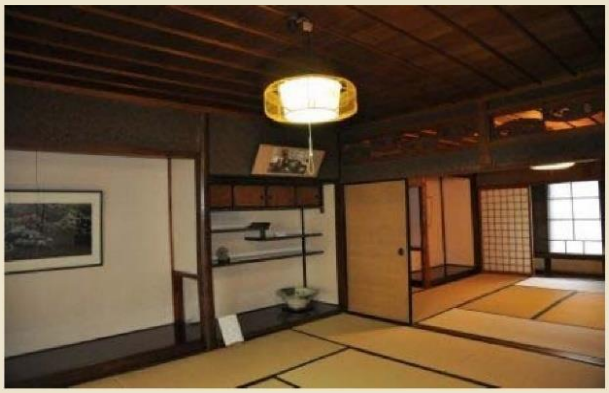
鳥取県東伯郡琴浦町

記念館外観

塩谷家は幕末から明治にかけて菊港を母港とする廻船問屋を営んだ家で、５代目当主は赤碕町長などの公職を務めた。当館は、昭和初期に「芸術写真」の分野で活躍した塩谷定好の生家でもあり、平成26（2014）年から、写真記念館として公開されている。主屋は明治39（1906）年に街道に面して建築された。木造２階建、切妻造妻入の大型の町屋。多数の座敷をもち、各部屋ごとに銘木や螺鈿細工などを使い分け、趣の異なった、質の高い意匠をみせる。ギャラリー棟は主屋の東に隣接して建つ、土蔵造２階建、切妻造妻入の建物で、明治7（1874）年に建てられた。元は土蔵であったものを、定好氏が戦後に店舗兼写真スタジオとして改修した。外観は土蔵造の面影を残しており、主屋とともに、街道沿いの町並みの景観に寄与している。米蔵は明治5（1872）年建築で、一部に設けた２階の床、鉄板を貼った内壁等、米蔵らしさを残す。質蔵は明治12（1879）年、新蔵は明治35（1902）年建築で、一部に設けた２階の床、鉄板を張った米蔵とともに、敷地後方の景観を形成する、また、建物を守っている孫の晋（すすむ）氏の丁寧な接客は、訪れた方を惹きつける。「写真を目的に来たが、こんな素晴らしい日本家屋も見られた。」と満足される声も多く聞かれるそう。

見どころ

生涯に渡って山陰の自然や人を撮り続けた写真家・塩谷定好の写真記念館。アメリカやヨーロッパで個展を開催するなど、国内外で世界的に高く評価された写真家。明治初期の商家である生家を改装した写真記念館には、ギャラリーはもちろん、生前の愛用品や生活ぶりを感じられる品々を見る事ができる。



【螺鈿仕上げの違い棚】
２階の10畳和室の床の間は、違い棚が螺鈿（らでん）仕上げとなっている、趣向を凝らした材など見ごたえがある。

【ギャラリースペース】
白を基調とした和モダンな空間。
ギャラリーは年に2度、季節に合わせた作品の掛け替えがあり、県内外問わずファンが幾度も訪れる。

【正面玄関】
一歩足を踏み入れると、懐かしい雰囲気に包まれる。地域の文化拠点でもあり、地元の方の生け花や作品展、和紙明りの展示なども催される。

【愛機の展示】
定好氏の愛機もギャラリーのいたるところに展示されている。

【米蔵を改装したカフェ】
素敵なお庭を眺めながら、併設しているカフェでゆったりとお茶を楽しみませんか♪

建物名称	塩谷定好写真記念館
建築年	1906（明治39）年
構造・様式	木造二階建・商家建築
所在地	鳥取県東伯郡琴浦町赤碕1568
電話	0858-55-0120
HP	http://teiko.jp
開館時間	9:00～14:00、火曜日休館
アクセス	ＪＲ赤碕駅下車　徒歩約20分、琴浦町駐車場
備考	国登録有形文化財

鳥取いなば有隣荘

とっとりいなばゆうりんそう

鳥取県鳥取市

池泉回遊式庭園

有隣荘は元は鳥取平野南部邑美郡国安の西尾家の旧宅であった。明治以降は鳥取県東部地域屈指の資産家で名門とされた家柄である。国安は平安期まで遡る集落と推定されるが千代川の氾濫原で度々位置を変えている。大正7（1918）年の大洪水を機に新しい堤防が村内西寄りを南北に縦断することになる。
西尾家を含む集落過半の120戸が集落の東側に接して集団移転することとなり、大正8（1919）年に着工し大正14（1925）年完成した。
昭和36（1961）年米原家の所有となり玄関とホール部分を改装した。鳥取市名誉市民で貴族院議員を務めた米原章三は晩年ここを好み有隣荘と名付け居住した時期がある。昭和60（1985）年鳥取県で開催された国体の時に高松宮の行啓に際し建具の一部取り替えと主屋北側に「高松の間」を増築し、その後は一般にも開放。現在は会席料理等食事の場として、また茶会、婚礼会場等として広く利用されている。

玄関前の佇まい

見どころ

現在客室として利用されている各和室はそれぞれに特徴がみられる。座敷十畳（佳友の間）は一間の床の間と違い棚に平書院を持ち、天井棹縁は床差である。柱は杉面皮、床柱は黒檀、床框は黒檀等の銘木を多用し主屋の座敷として相応しい。長押は松材で米原家家紋の木瓜紋の釘隠しが打たれる。離れ十畳（簡堂の間）は床が一段高く、用材は栂が多用されており、一間半の床の間・違い棚・付書院を持ち、天井棹縁は床差である。長押を内法と天井下に入れ、菊紋の釘隠しを打ち、付書院に透かし彫りの欄間を有す。茶室は二畳中板洞庫付で台目幅の床を持つ。床柱は皮付き赤松の丸物、茶道口踏込の隅柱は竹、塗り残しの丸窓をあける。水屋は三畳間と茶室茶道口に繋がる廊下脇に設けられている。照明器具は建築当初のもので大正期のモダンな和風意匠で、電線を接続しない引っ掛け式となっており、正式な茶会の時等には簡単に取り外すことができる。
鳥取県の富裕層の近代和風の大邸宅としての特徴を示し造形の規範となっている建造物である。

【庭園】
八坂山を借景とした心字池を回る池泉回遊式庭園で上方の庭師の作庭とされ、大ぶりの石と踏分石を多用した近代和風庭園である。農家的平面の主屋に旧藩主池田家拝領と伝わる離れ等数棟を庭に雁行して配置し、庭園と建築が内外共に一体となって美しい調和を成している。

【栂の間】
「栂の間」は木造平屋建て桟瓦葺（黒褐色施釉）入母屋造りで主屋の最も奥にあり、庭園側南より六畳間・三畳間・茶室が並ぶ。東西に棟を並べ雁行する建築群の中で、棟を南北に向け庭園側にやや低めの入母屋の妻側を見せ、独立した離れとして外観に変化を与えている。
六畳間は、柱・長押・鴨居・床柱・落掛・付書院棚等ほぼ全ての用材は栂の柾目の良材が多用されている。茶室に繋がる廊下の四間に及ぶ栂柾目の長尺板は見せ場である。一間の床の間と床脇には地袋と黒漆枠の火打窓を設け、襖は金が縫い込まれた瑞雲の模様で、有隣荘では最も古いながらも他の座敷や離れと趣を異にして華やかな室内空間を演出している。

栂の間

【食事】
昼食は、有隣御膳　3,630円～
夕食は、会席料理 13,310円～
その他、お茶会・催事等
※すべての予約が必要
※建物の案内・見学付き

建物名称	鳥取いなば有隣荘
建築年	1925（大正14）年
構造・様式	木造平屋建
所在地	鳥取県鳥取市国安895
電話	0857-53-2686
HP	http://www.yurinsou.com
開館時間	昼食:11:30～14:00　夕食:17:30～21:00 予約制、不定休
アクセス	鳥取駅から車で10分　駐車場有
備考	国登録有形文化財

小泉八雲旧居

こいずみやくもきゅうきょ

島根県松江市

門をくぐるとそこは静謐な空間。白い障子が美しい

『怪談』『知られざる日本の面影』の著者である小泉八雲（本名ラフカディオ・ハーン）がこの家に暮らしたのは明治24（1891）年6月から11月である。
ニューヨークの出版社の記者として来日したハーンはすぐに島根県松江市の尋常中学校と師範学校の英語教師として着任した。そこで「へるん先生」と呼ばれ親しまれた八雲が日本人の妻であるセツと結婚後、松江での第三の住処としたのが旧士族根岸千夫の留守邸であった。

建物は享保年間の築とも言われており、松江城を囲む城山稲荷の森と濠に面している。背景には赤山を従え、現代の今も尚、季節の移ろいを色濃く感じるエリアの中にある。
長く高い塀に囲まれたこの家の門を潜り石段を上がると、そこには白い障子に囲まれた玄関が端正な顔を見せている。

この家は庭に囲まれた家である。
八雲は旧居をぐるりと取り囲む庭と、そこに暮らす「有情のものたち」小さな生物をこよなく愛した。

書斎から眺める蓮池を八雲はとりわけ気に入っていた。家の描写と庭の描写は著書にも繰り返し登場する。
塀と植物によって外の世界と遮蔽されたこの世界は今もそこにあり、八雲が愛した日本の姿を訪う人に今も伝えている。

見どころ

書斎から庭を望む

庭と家の作り出す様々な陰影。
赤山から聞こえる山鳩の鳴き声と、蓮池に蛙が飛び込む小さな水音。
町中にありながら小さな自然とその自然が出す音と気配であふれている。

書斎北西面

書斎は元茶室に準じて作られたと言われている。
様々な物語がこの家で妻セツの口から語られ、八雲の手で物語となって紡がれた。

南庭

南庭は建物正面から西側に建物を取り囲み、北庭へと連続する。
庭に配された灯篭や手水鉢、様々な形の岩なども八雲は好んで描写している。

昆虫や蛙、小さな生物が日々見せる姿を八雲は愛した。
池に棲む蛙を守るため食べ残りの肉を皿のまま石段に置き、家中でイタチや蛇から蛙を庇ったと伝えられている。

建物名称	小泉八雲旧居
建築年	江戸時代後期、1982～83（昭和57～58）年半解体修理
構造・様式	木造瓦葺平屋建
所在地	島根県松江市北堀町315
電話	0852-23-0714
HP	https://www.matsue-castle.jp/kyukyo/
開館時間	8:30～18:30（10/1～3/31 17:00）
アクセス	松江駅からバスで約20分
備考	史跡名勝天然記念物

旅館美保館本館

りょかんみほかんほんかん

島根県松江市

美保関は古くから海上交通の要として栄えてきた。
朝鮮半島や環日本海交易の拠点として繁栄。
江戸から明治にかけては北前船の寄港地として栄え廻船問屋が軒を連ねた。
美保館を営む定秀家は源平合戦の東の将、松田十郎藤原定秀が石橋山の戦いに敗れ、美保関に定住したのが始まりとされ、四十一代定秀寛一・ナツ夫婦が美保関で初めての旅館である美保館の営業を開始している。

美保関神社から続く青石畳通りは、海石を切り出して作られた石畳の路で、雨の日は石畳がうっすら青く輝き、一際美しい。
通りを挟んで海側に美保館本館、山側に二代目美保館が佇み、青石畳通りの風情を作り出している。

石畳通りに面した入口をくぐると、格子天井の重厚感ある玄関空間の向こうに、思いがけず明るい空間が広がっている。昭和4（1929）年に当初中庭だけだった空間をガラス天井のアトリウムに改築。
アトリウムを囲んで張り巡らされた廊下と階段、趣向を凝らした数寄屋造りの部屋や空間は訪れる人を日常から離れた異空間へと誘う。
アトリウムを含むこの空間ではコンサートや講演会など様々な催しが開催されている。

見どころ

美保館本館の見どころは何といってもアトリウムを囲む吹き抜け空間。
そしてそれを囲む回廊に設えられた様々な座敷や小部屋。
その連続性が生み出す変化に富んだ景色の面白さにある。

欄間・障子・丸窓。
部屋毎に様々な意匠が凝らされており、当時の大工や指物師の高度な技術と遊び心を垣間見ることが出来る。

トップライトからの日差しが凛とした影を落とす昼間も、アトリウムを挟む部屋の障子が淡く染まる夜の姿も。
それぞれに美しく、是非どちらも堪能することをお奨めしたい。

建物名称	旅館美保館本館
建築年	1905（明治38）年建築/1912-1925年（大正期）増築
構造・様式	木造瓦葺二階建
所在地	島根県松江市美保関町美保関573
電話	0852-73-0111
HP	https://www.mihokan.co.jp
開館時間	旅館として営業中（見学可能/会合・会食・宿泊は要予約）
アクセス	松江駅からバスで80分（乗り換え有） 境港駅からタクシー15分（又はバス40分～1時間）
備考	国登録有形文化財

旧堀氏庭園 楽山荘客殿

きゅうほりしていえん らくざんそうきゃくでん

島根県鹿足郡津和野町

津和野町中心部から約10km上流の畑迫地区。
堀家は代々、銅山年寄役を世襲し、天領差配家として三百年の歴史をつないできた名家。経営の繁栄に従って本宅を中心に庭園や学校、病院などを建設し、歴史的・文化的・景観的に価値の高い建造物や遺構を数多く残している。

※「津和野町教育委員会」所蔵

見どころ

楽山荘客殿は、書院造を基調にしながらも、各室で意匠を凝らした数寄屋風の座敷からなる。多様な材の取り合わせの巧みさや、ハツリ目のつけ方など数寄屋や茶室などの作事を得意とした大工によることがうかがえる。

■１階主座敷　床柱は赤松の皮付

使われている材料や、欄間、障子、目に入るもの全てが魅力的なものとなっている。

■２階主座敷
床柱は北山杉天然絞り丸太

琵琶台の天井が長板を縦横に並べた幾何学模様であるのに対して、床の間の天井は格天井にして変化を付けている。境には赤松の面皮を吊り束としている。

客殿には茶室（小間）をあわせて７つの床の間があり「真・行・草」の座敷デザインをみることができる。

漆喰仕上の土塀は東西に100mを超える。屋敷地内の主屋と客殿とは小さな庭門で区画されており、客殿と庭園とによる、まさに庭屋一如である。一年を通じて美しい景観を作り出しているが、その中でも秋の庭園は絶景。この屋敷対面にある「和楽園」周辺地を含んだ約6.5haの範囲が国の名勝に指定されている。

１階主座敷から中間域を通した新緑の庭園
薄暗い空間座して身を休める

２階障子越しに見える紅葉の景色
美しさが客をもてなす

建物名称	旧堀氏庭園 楽山荘客殿
建築年	1897（明治30）年上棟　1900（明治33）年竣工
構造・様式	木造瓦葺二階建
所在地	島根県鹿足郡津和野町邑輝795
電話	0856-72-0010
HP	http://tsuwano-bunka.net/horiteien/
開館時間	9:00～16:30 月曜休館日※11月は無休　月曜が祝日の場合翌日が休み
アクセス	津和野駅から町営バス長野行き約20分、堀庭園下車四有

いかしの舎

いかしのや

岡山県都窪郡早島町

長屋門　　いかしの舎喫茶

い草の町として、また、金毘羅往来の地として、昔から経済・文化とともに隆盛を極めた早島。その長い歴史は、早島に独特の文化的土壌を培い、誇り高い町民性をはぐくんできた。「いかしの舎」は畳表・経糸（たていと）の問屋で当時の繁栄を物語る代表的町屋・寺山家を改修した建物で、早島に受け継がれた遺産を保存しながら、新しい文化を創造する拠点として今に蘇らせたものである。
「五十橿舎（いかしのや）」とは、明治期の歌人で岡山市に在住した岡直盧（おかなおなり）がここを訪れた際、寺山家に対して命名したもので、「盛りに足りておごそか」という意味である。

見どころ

往時をしのばせる貴重な建物でありながら、多目的文化交流の施設として、美術展示会、ミニコンサート、茶会、食事会、法要、ウェディング等、幅広く活用されている。建物はすべて自由に見学でき（貸し切り時を除く）、四季折々の姿を見せる庭を眺めながら、茶房にてゆっくり食事やお茶を楽しむこともおすすめしたい。

母屋１階座敷

母屋１階座敷

長屋門

いかしの舎喫茶

母屋１階座敷

【長屋門（ながやもん）】
現在は県道となった、金毘羅往来に臨む。
１・２階にそれぞれ１２畳・２０畳の和室を備え、ヨガ教室やフラワーアレンジメント教室等に利用されている。

【いかしの舎喫茶（いかしのやきっさ）】
伝統的ななまこ壁の蔵を利用した茶房。１・２階ともギャラリースペースがあり、開放的な吹抜けを活かした一体的利用もできる。
大きな一枚ガラスからは、来客を迎える表庭の様子が窺える。

【母屋（おもや）】
元は厨であったと思われる大きな土間から板間の玄関へ上がると、田の字に並ぶ和室から南側の中庭に面する広縁へと続く。
２階は七島藺（しちとうい）を使った琉球畳を敷き詰めた24.5畳の大広間。創建時の丸太の梁は６尺ほどの高さにあり、眼前に迫る。
朝鮮張りの回廊の先には中国風の応接室があり、栄華が偲ばれる。

【竹坪庵（ちくへいあん）】
母屋から、渡り廊下でつながる離れの茶室。
平成4（1992）年の改修時、京都より移築。古田織部の作と伝えられる四畳台目茶室「八窓庵（はっそうあん/明治24（1891）年、興福寺の大乗院庭内より奈良国立博物館中庭へ移築）」の写しである。
母屋からいったん中庭へ降りると、腰掛待合へとつながる露地が設えられており、世俗を離れ清浄無垢の精神に至るという茶の湯の心を感じることもできる。

母屋玄関より表庭を見る

２階大広間

中庭（露地）

中庭から見る竹坪庵

建物名称	いかしの舎
建築年	明治末期 1992（平成4）年に改修
構造・様式	木造二階建
所在地	岡山県都窪郡早島町早島1466
電話	086-483-1243
HP	http://www.town.hayashima.lg.jp/ikashinoya/
開館時間	9:00～17:00 （月曜日、第3火曜日休館。但し祝日の場合は翌火曜日が休館。）
アクセス	JR瀬戸大橋線早島駅から徒歩12分 瀬戸中央自動車道早島ICから車で2分　駐車場あり
備考	見学は無料。部屋使用は有料。

脇本陣 木代邸

わきほんじん きしろてい

岡山県真庭郡新庄村

木代邸外観

脇本陣木代家は、出雲松江藩松平氏の参勤交代の往来の宿場として栄えた新庄宿で脇本陣をつとめた家である。屋号を「向馬場屋」と称し、江戸時代の終わり頃に建てられた幕末を代表する建物で三列六間取りの大規模家屋である。入口の柱には馬つなぎの環が備えられ、またトイレには今でも刀掛けが残っており、江戸の風情を今に伝える大名旅籠である。木代邸はがいせん桜通りに面しており、家並みの前には残したい日本の音100選に選ばれた涼しげな音色を奏でる美しい小川があり、地域の人々の生活用水として大切にされている。

木代邸　玄関先の小川の水車

木代邸　内部

見どころ

脇本陣の木代は分家である。本家木代は出雲の尼子氏に仕え、尼子氏の出城である新庄沢城主吉田修理の家臣であった。尼子氏が滅ぶとともに、武士を捨てここに農民として宿場の町並みに居を構えたのである。
敷地内にある施設は自由に見学できる。明治時代に醤油製造を行っていた蔵を改造したさくら茶屋では郷土料理を堪能できる。桜の時期に訪れることをお勧めする。
木代邸中庭には新庄村の歴史を感じることのできる展示スペース「史紀庵」があり、出雲街道新庄宿、がいせん桜、脇本陣木代邸についての資料が陳列されている。

親子格子

廊下の丸窓

蔀戸

刀掛け

蔀戸（しとみど）は、通常外に面した開口部に設けるが室内にある蔀戸は県下でも珍しい。

がいせん桜は、1906（明治39）年に日露戦争での戦勝を記念して旧出雲街道宿場町の両側に植えられた桜の通称。毎年桜の開花期にがいせん桜まつりが開催される。「岡山県で最後の桜の名所」として有名である。

【木代邸】
木代邸は切妻平入り中二階の建物で、屋根は石州瓦の桟瓦葺で赤茶色の独特の色合いである。外壁は白漆喰仕上げの塗壁造り、腰壁は下見板張りで鎧伏せの黒っぽい板張りで、壁の白さとの対比が美しい。部屋は表側に店の間、玄関の間、奥の間があり、裏側に居間、中納戸、奥納戸の三列六間取りである。さらに囲炉裏の間、湯殿、厠とある。囲炉裏の間は板張りの部屋で、囲炉裏が二か所もある珍しい造りとなっている。雪が降り積もる厳しい冬に峠を行き来する者にひとりでも多く、一刻も早く暖を取ってもらいたいという配慮を感じることができる。

史記庵

囲炉裏の間

建物名称	脇本陣 木代邸
建築年	1857（安政４）年
構造・様式	木造二階建
所在地	岡山県真庭郡新庄村中町1107
電話	0867-56-3178（新庄村教育委員会）
HP	http://www.vill.shinjo.okayama.jp/index.php?id=149
開館時間	新庄村教育委員会へ問い合わせ
アクセス	JR姫新線 中国勝山駅／中鉄バス40分 米子自動車道 久世IC／40分、又は蒜山IC／25分
備考	新庄村有形文化財

後楽園 延養亭・島茶屋

岡山県岡山市

こうらくえん えんようてい・しまぢゃや

延養亭

【延養亭（えんようてい）】
藩主の居間で、園内で最も重要な建物だったが、戦災で焼失し、1960（昭和35）年に当時第一級の木材と技術で「御茶屋御絵図」を元に築庭当時の間取りが復元された。
築庭当初から現在の位置に建てられ、藩主の座る主室からの眺めが最も美しくなるように、庭園が作られている。現在もこの景観の保全につとめている。沢の池、唯心山、借景の操山と、園内外の景観が一望できる、後楽園の中心的建物である。現在、期間限定で特別公開がある。また、お正月や月見などの年中行事の時には箏の演奏が催される。
延養亭には隣接する茶屋「臨い軒」がある。天井に龍の絵が描かれていることから「龍の間」とも呼ばれている。戦争で焼失し、延養亭とともに復元された。現在の龍の絵は、倉敷市出身の日本画家池田遙邨画伯によって、書かれたものである。

（※「臨い軒」も特別公開）

【島茶屋（しまぢゃや）】
園内最大の池である「沢の池」の中の島にある御茶屋である。
園路より西に向かって太鼓橋を渡る。通常は一般公開されていないが、茶室として人気の貸し出し建築物である。

島茶屋

板の筋違い橋で繋がっている御野島には釣殿があり備前焼の鶏が寄棟の棟上に置かれている。（御野島へは渡れません）

見どころ

非常に洗練されたシンプルな室内。障子を開けると素晴らしい開放感と美しい景色は時を忘れるほどである。治政は茶道を好み、書画、俳句などにも秀でていたが、特に大文字の名人として知られていた。写真の掛け軸は「致遠（ちえん・遠きを致す）」（延養亭）

延養亭 床の間と池田治政の書

延養亭 藩主の座る主室からの眺め

４畳半に床の間、床脇付。東に、２畳と直角三角形の板間付。４畳半は、腰付障子で南と西が解放され、障子の外には、濡れ縁が廻る。濡れ縁には、南側に整形された石の、西側に自然石の沓脱石が配置されている。東側２畳半台の室の東壁面は、５尺２枚割の腰付障子で、勝手口だったと思われる。３角形の板間の斜辺に辺る壁面には、丸窓が添えられている。４畳半からは、南の唯心山から西の延養亭、２畳半の丸窓からは、東南の流店、千入の森、桜林、梅林が眺められる。
基礎は沓石、根回り竹横木下は差石。（島茶屋）

島茶屋 室内から沢の池の眺め

島茶屋 室内から続く竿縁

島茶屋 丸窓

島茶屋 沢の池東岸からの眺め

【庭園】
岡山後楽園は、江戸時代を代表する大名庭園の一つである。延養亭や能舞台を中心とした亭舎、園内各所に置かれた御茶室や祠には、歴代藩主の思いが込められている。
広い芝生地や、池、築山、亭舎が園路や水路で結ばれ、歩きながら移り変わる景色を眺めることができるよう、工夫された庭園である。通年四季折々の景観に合わせた、趣向を凝らしたイベントで賑わう。年に数回ある人気のイベント、夜間特別開園「幻想庭園」が開催される。

[ウメ（梅）] 時期：2月上旬～3月上旬
[ｻｸﾗ（桜）] 時期：3月下旬～4月上旬
[ツツジ] 時期：4月中旬～5月下旬
[ﾊﾅｼｮｳﾌﾞ（花菖蒲）] 時期：6月上旬
[ハス] 時期：6月下旬～7月下旬
[紅葉] 時期：11月中旬～12月上旬

延養亭 室内からの眺め

【芝を大量に使った庭】日本に広く自生している野芝を使った庭園である。
築庭当時、芝は沢の池西側の延養亭から見える範囲にだけ使われ園内の大半は田畑であった。その後、田畑の削減に伴って芝生地が広がり、園全体に使われたのは明治以降。
【曲水】昔は旭川の約4km上流から対岸まで引いた後楽園用水を利用していたが、今は伏流水をくみ上げている。その水を池や滝に上手に利用し、優れた水の景色を作り上げている。

入り口付近から沢の池と島茶屋の眺め

建物名称	後楽園 延養亭・島茶屋
建築年	延養邸：1960（昭和35）年復元　島茶屋：不明
構造・様式	木造平屋建
所在地	岡山県岡山市北区後楽園1-5
電話	086-272-1148
HP	https://okayama-korakuen.jp
開館時間	3月20日～9月30日　7:30～18:00 10月1日～3月19日　8:00～17:00　年中無休
アクセス	ＪＲ岡山駅から徒歩25分　駐車場有
備考	特別名勝

由加山 蓮台寺 客殿 通天橋

岡山県倉敷市

ゆがさん れんだいじ きゃくでん つうてんきょう

境内よりを通天橋を望む

日本三大権現のひとつ、瑜伽大権現をお祀りし、厄難、災いを払う、厄除け祈祷を行っている。「厄除けの寺」として知られている由加山蓮台寺は、桜のシーズンになると境内は数千本の桜が咲き誇りピンク色に染まり美しい。
特に境内にある双樹満願桜は有名で、多くの参拝者が訪れる。

通天橋室内

見どころ

由加山は、江戸時代には四国の金毘羅大権現と両参りが盛んであった瑜伽大権現をお祀りする蓮台寺の御山である。3万坪の境内には観音堂、権現堂、大師堂、多宝塔など数多くの建築物があるが、中でも備前藩主池田侯の参拝時に使用された蓮台寺客殿は県指定重要文化財で、円山応挙の竹鶏の図をはじめ108点の貴重な障屏画が並び、江戸時代にお殿様が宿泊参拝した様子をうかがい知ることができる。
皇室の方が座られた御成の間は、中段、上段の間に加え上々段を設けた造りで、現存するものでは松島の瑞巌寺と由加山蓮台寺の2箇所のみである。
また、上段の間正面に掲げられた掛軸は備前藩主の直筆の作品で、「蓮台寺」の三文字が書かれている。
客殿の奥には四季折々の風景を楽しめる庭園が広がっている。

庭園

御成の間

孔雀の間

傾斜の階段

階段内部

通天橋から窓を眺める（桜の絵屏風）

【通天橋】
本殿と客殿を結ぶ通天橋は、桜の時期には無料で入ることができる。通天橋の窓からは満開の桜が絵屏風のように見え、参拝者の心をうるおしてくれる。壁に飾られた絵画を楽しむことができ、芸術文化の交流フロアにもなっている。
通天橋の奥には備前焼の水瓶が展示されており、季節の草花が拝観者を優しく迎えてくれる。
精進料理を申し込むと客殿を拝観することができ、総本殿にて蓮台寺の説明とお清めを受け、県重要文化財である客殿拝観の後に四季折々の逸品膳を堪能できる。
また大茶盛は奈良西大寺の僧叡尊が正月行事の終わりに１年の健康を念じたお茶を民衆に振舞ったことに由来しており、蓮台寺はその西大寺より唯一認可を受けたお寺である。大きなお茶碗で一服、心静かに悠久の時を味わう事ができる。

備前焼の水瓶

大茶盛

庭園

建物名称	由加山 蓮台寺 客殿 通天橋
建築年	寛政年間（1700年頃）完成
構造・様式	客殿：木造平屋建
所在地	岡山県倉敷市児島由加2855
電話	086-477-6222
HP	http://yugasan.jp/
開館時間	9:00～16:00
アクセス	JR瀬戸大橋線「児島駅」よりタクシーにて約15分 瀬戸中央自動車道「水島IC」より約10分　駐車場有
備考	客殿　県指定重要文化財 拝観料400円

特別史跡 旧閑谷学校

とくべつしせき きゅうしずたにがっこう

岡山県備前市

泮池より鶴鳴門・講堂を望む

閑谷学校は、江戸時代に岡山藩主池田光政によって創設された庶民のための公立学校である。その姿はほぼ建築当時のままであり、慌ただしい日常生活とは一線を隔す凛とした佇まいを保っている。創学の精神は形を変えつつ現代に受け継がれ、岡山県内外の生徒が研修に訪れる現役の教育の場である。

講堂（国宝）

見どころ

うねるように連なる765mの石塀に囲まれた敷地内には、閑谷学校の中心的建物である講堂をはじめ、鶴鳴門と呼ばれる正門、孔子像を納める聖廟、池田光政を祀る閑谷神社など備前焼の瓦を用いた精工な造りの建築物が並び立ち、２本の楷の木が四季おりおりの色をまとう様は壮観である。

なお、現在は資料館として使用されている旧閑谷中学校本館は明治時代の校舎であり、納められている資料とともにゆっくりと時を過ごしてほしい空間である。

講堂内部

石塀

椿山

紅葉した楷の木

備前焼の瓦

【講堂・小斎】

桁行7間、梁間6間、一重入母屋造、備前焼の瓦を用いた錣葺の屋根をもつ。内部には10本の丸柱に囲まれた内室とそれを取り囲む入側があり、柱と床は拭漆仕上げである。鏡のような床は周辺の自然の色をとりこんで季節により表情を変える。講堂の南側には小斎と呼ばれる一重入母屋造、こけら葺の簡素な造りの建物があり、内部には四畳半二間と浴室が備えられている。藩主が閑谷学校を訪れた際に使用された建物で、子ども達が勉学に励む様子を眺めた様を想像すると当時の藩主の教育への想いが伝わってくる。小斎には質素ながらも床や炉があり、窓から見える借景の山々は見事である。

【習芸斎・飲室】

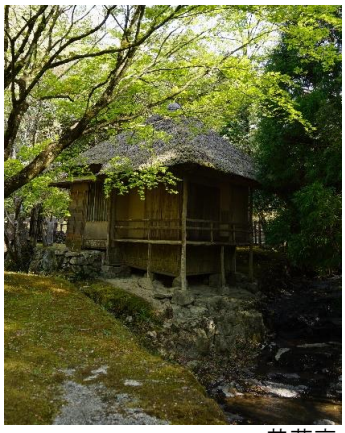
講堂の西側に連なる建物で、習芸斎は教室、飲室は休憩室である。飲室には石を用いた炉があり、冬場に炭で暖をとったり、湯を沸かしてお茶を飲みながら師匠と生徒が交流をもった空間である。

【椿山】

閑谷神社の東には椿がうっそうと生い茂る小道があり、その先の小山には池田光政の髪などが納められている。椿に囲まれた空間は不思議と心落ち着く空気を醸し出している。

【黄葉亭】

閑谷学校から500mほど山あいの小道を歩くとみえてくる、四畳半一間の閑静な茶室であり、来客をもてなすために使用されていた建物である。小川の合流する土地に文化10（1813）年につくられ、ひっそりと佇む様は時の流れが止まっているかの様である。黄葉亭にたどり着くまでの小道には、池田光政の命をうけ学校建設に携わった津田永忠の宅跡があり、当時と変わらぬ静かな山間の景色を楽しむことができる。



黄葉亭

建物名称	特別史跡 旧閑谷学校
建築年	1670（寛文10）年～1701（元禄14）年造営
構造・様式	講堂：木造一重入母屋造本瓦錣葺（備前焼瓦）
所在地	岡山県備前市閑谷784
電話	0869-67-1436
HP	http://shizutani.jp
開館時間	9:00～17:00　休館日：12月29日～31日
アクセス	JR山陽本線吉永駅下車タクシーで約8分 駐車場有 JR赤穂線備前片上駅下車タクシーで約10分
備考	特別史跡（旧閑谷学校） 国宝（講堂） 重要文化財　登録有形文化財（閑谷学校資料館）

重森三玲意匠書院復元

岡山県岡山市

しげもりみれいいしょうしょいんふくげん

書院全景

岡山県立美術館の二階展示室の一角に、作庭家重森三玲意匠の書院がある。この展示室には古い時代の掛軸から新進気鋭の作家の現代的な作品まで、さまざまな種類の作品が並べられる。そのすべてを受け入れるだけの寛容さがこの書院にはあり、それこそが和の空間が持つ魅力だと思うのでここに紹介したい。

重森三玲は、岡山県吉備中央町出身の作庭家・庭園史家である。18歳にして自宅に茶室を設計し、上京後もいけばな、日本画、庭園などについて造詣を深め、京都市東山区にある東福寺の「国指定名勝 東福寺本坊庭園」を皮切りに多くの庭園を完成させる。

岡山県吉備中央町に重森三玲の姉妹が住んでいた民家があり、その民家に三玲によって設えられたこの書院が岡山県立美術館に復元されたのは2009（平成21）年のことである。建物、内部とも痛みが激しかったため、部屋全体は実測のもと作成された図面をもとに新たに作成されたが、重森三玲らしいデザインの襖、障子、違い棚などは持ち主より美術館へ寄贈され、修復された。

６畳に床の間、違い棚がついている空間は、住宅の中にあるとそれはごく普通の風景だが、美術館の展示室の一部にあると縁側も含めると思いのほか広く感じられる。中まで立ち入ることはできず、展示スペースの一部として和の空間を味わうという趣である。日本画の展示の際には床の間に掛けられる軸はよりリアリティをもって鑑賞することができ、焼き物の展示の際にはその焼き物が日常に溶け込む様子が想像でき、今回の取材時のように現代アート作品の展示の際には、その作品が書院を含めて成り立つ様子に感嘆させられる。

見どころ

特筆すべき見どころはなんといってもこの襖であろう。変形の激しかった骨組みは新たに作られており、損傷していた襖紙は復元されている。襖紙は、縁を外した部分に残る当時の色合いを手掛かりに京表具師の手によって再現された。復元に使用された紙は、昭和50年代の桂離宮改修で使用されたものである。三玲の憧憬の的であったであろう桂離宮と同じ材料が使われたという点も興味深い。

独特な色合いの市松模様と、その前面を流れる雲のような不思議な模様は、眺めているとさまざまな形に見えてきて飽きることがない。その模様の中につく引き手は七宝焼きで、美しい模様が描いてあるという。

復元によって当時の色合いを取り戻した襖が、藍と銀箔の大柄な模様というある種現代的な佇まいだからこそ、どんな作品とも折り合う空間を造りだしていると感じられる。

この書院のある岡山県立美術館は、昭和63（1988）年に開館した岡田新一設計の建物である。建物はもちろんのこと、毎回充実した内容の企画展、常設展を和の空間とともにぜひ鑑賞していただきたい。

参考文献：岡山県立美術館　重森三玲展　パンフレット

取材当日は太田三郎氏の作品が展示中であった。作品名：Milk
書院も表現の一部として取り込んでいる。

建物名称	重森三玲意匠書院復元
建築年	2009（平成21）年
構造・様式	―
所在地	岡山県岡山市北区天神町8-48　岡山県立美術館内
電話	086-225-4800
HP	https://okayama-kenbi.info/
開館時間	9:00～17:00（入館は閉館30分前まで）
アクセス	JR岡山駅後楽園口（東口）から徒歩15分 地下駐車場：38台（近隣有料駐車場有）
備考	月曜日、年末年始、展示替期間中は休館

旧広兼家住宅（通称：広兼邸）

岡山県高梁市

きゅうひろかねけじゅうたく（つうしょう：ひろかねてい）

楼門づくりで城郭にも劣らない堂々とした石垣は、高さが15m、長さが100mあり、今もそのままに当時の富豪ぶりをたたえている。駐車場からの眺めは圧巻で、映画のロケ地としても知られている。

旧広兼家住宅（通称：広兼邸）は享和・文化の頃、小泉銅山とローハ（硫化鉄＝ベンガラの原料）の製造を営み、巨大な富を築いた大野呂の庄屋・広兼氏の邸宅で、お城のような石垣と主屋・土蔵3棟・楼門・長屋は江戸末期に建設された。庭園には水琴窟が設置されていて、規模、構造とも雄大な城郭を思わせる構えで当時の富豪の姿を偲ばせている。

楼門

石垣に沿ってスロープを上がった先に楼門があり、門の上には不寝番部屋が設けられている。主屋の正面屋根では逆立ちした狛犬も侵入者に睨みをきかせている。

屋根上の狛犬

見どころ

広兼邸は山を背負うようにそびえ立つ大邸宅である。春は桜、秋は紅葉した山に包まれ、また庭に植えられた様々な木や花によって、季節ごとにその表情を変える。

毎年５月にイベント「広兼邸　花めぐり」が、離れ座敷と衆楽園で開催されている。庭からでも鑑賞できるが、イベントの期間中は普段上がることができない座敷に上がって生け花を鑑賞できるチケット（お茶とお菓子付）も販売される。

本宅だけで323㎡（約98坪）あり、離れ座敷・土蔵・楼門・長屋まで入れると全部で723㎡（約220坪）56部屋ある。また、邸宅の向かいには明治初期、広兼氏個人の神社として天広神社が建てられた。境内は庭園風となっており、衆楽園と呼ばれている。

離れのお茶室

土蔵の展示品

本宅の庭に面した座敷は、手前から客間、玄関、店の間、控間、さらに台所と続く。

水琴窟

本宅の隣に佇む離れ座敷は大正時代に建設され、当主の婚礼に一度だけ使用された。床の間や襖も素晴しく、お茶室化粧部屋・客間・風呂等を備えている。離れの奥にある土蔵には、当時の紋付や調度品屏風などが展示されている。

広兼邸から４kmほど山道を行くと突如、赤銅色の石州瓦とベンガラ色の外観で統一された、見事な町並みが現れる。ここが国の重要伝統的建造物群保存地区に指定されている「吹屋の町並み」である。

吹屋の特異な点は、豪商個々の屋敷が豪華さを纏うのではなく、旦那衆が相談の上で石州（今の島根県）から宮大工の棟梁たちを招いて、町全体が統一されたコンセプトの下に建てられたという先進的な思想にある。旧片山家住宅（国指定重要文化財）、旧吹屋小学校（県指定重要文化財）などの見どころも多く、広兼邸と合わせて、山あいの町並みにもぜひ足を延ばしていただきたい。

建物名称	旧広兼家住宅（通称：広兼邸）
建築年	1810（文化7）年　（離れは大正時代）
構造・様式	木造入母屋造・瓦葺
所在地	岡山県高梁市成羽町中野2710
電話	0866-29-3182
HP	高梁市観光協会 http://takahasikanko.or.jp/modules/spot/index.php?content_id=25
開館時間	10:00～17:00（12月～3月は10:00～16:00） 休館日：12月29日～1月3日
アクセス	JR伯備線 岡山→備中高梁 約50分 →備中高梁駅から定期路線バスで吹屋へ 約１時間 吹屋バス停より約４km　駐車場35台あり
備考	高梁市指定重要文化財

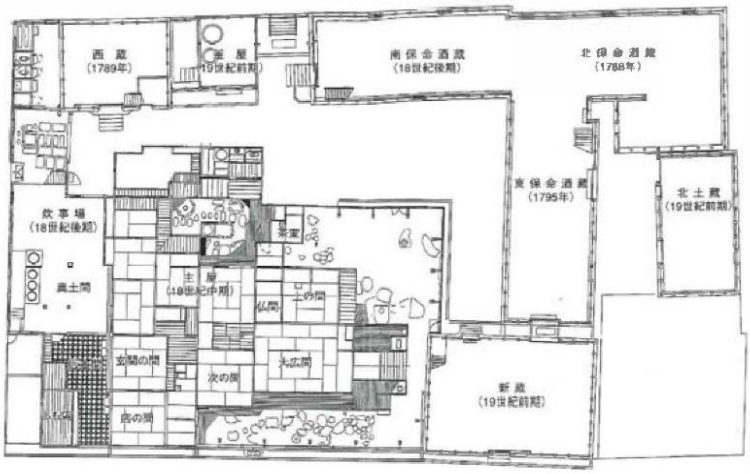
太田家住宅

おおたけじゅうたく

広島県福山市

太田家住宅は、主屋や保命酒醸造蔵など９棟から構成される。建物の建築年代は、文書や日記、棟札などから、主屋が１８世紀中期、炊事場・南保命酒蔵が18世紀後期、北保命酒蔵が天明8（1788）年、西蔵が寛政元（1789）年、東保命酒蔵が寛政7（1795）年、釜屋・新蔵・北土蔵が19世紀前半頃と考えられている。本建物は太田家住宅と呼ばれているが、もとは中村家によって江戸時代中期から後期にかけて家屋敷を購入しながら拡張・増築され、現在の規模となる。明治期になって太田家が受け継ぎ今日に至る。

保命酒とは、創業者である中村吉兵衛が餅米を主原料に、粳米、焼酎16種類の漢方薬を使って醸造した薬酒である。宝永7（1710）年には藩から手醸造販売権を与えられていたが、明治になり専売権がなくなると保命酒醸造業者が増加、競争の激化と共に太田家は製造を終えた。現在、原料や醸造方法は江戸時代とほとんど変わらない。ただしオリジナル中村家の薬味の調合は一子相伝であったため、各醸造元の工夫によって多少味に違いがある。



見どころ

蔵と隣接する主屋は、実に美しい日本建築である。小規模な庭園が設けられ、住んでいた人やお客の目を楽しませる造りとなっている。表の通りからも見える市松模様の土間床は、瓦と漆喰で構成されたモダンなデザインである。天井には網代天井が施され、ハイサイドで設けられた窓は土間レベルから開閉できる装置がついている。蔵の壁にあるナマコ壁は、１や４、５といった数を表現し、まるでサイコロのようである。

太田家住宅は、平成3（1991）年5月31日に重要文化財の指定を受けており、平成8（1996）年から平成13（2001）年まで、約6年の歳月をかけて保存修理事業が行われ、屋敷構えとしては最も充実した江戸時代末期から明治時代初期の姿に復旧整備された。四方が道路で囲まれた本敷地であるが、東（見取り図の下）の道路の対面に、同じく重要文化財指定を受けた別邸「太田家住宅朝宗亭」が建っている。雁木を独占するように海に面しているため、専用の船着き場を持っていたと考えられる。太田家の一連の建物群は、街区をまるごと占めるような大規模なものであり、鞆の浦の景観形成において重要な役割を果たしている。

参考文献：太田家住宅を守る会　パンフレットより

建物名称	太田家住宅
建築年	18世紀
構造・様式	木造
所在地	広島県福山市鞆町鞆842
電話	084-982-3553
HP	—
開館時間	10:00～17:00（入館は16:30まで　火曜休館）
アクセス	JR福山駅南口から鞆鉄バス鞆線で「鞆港」下車、徒歩5分
備考	国指定重要文化財

恋しき

こいしき

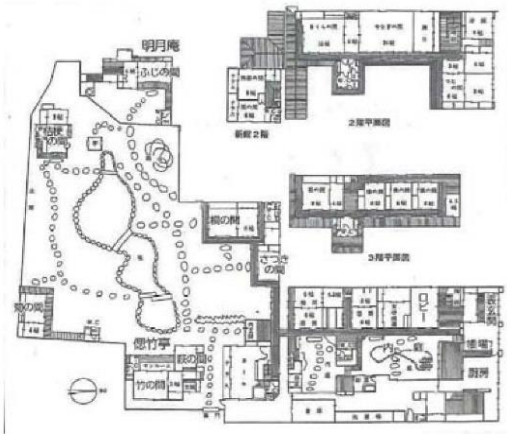
広島県府中市

「恋しき」は近世の宿場町によく見られる切妻平入りの町家で、伝統的な木造三階建ての旅館建築である。明治5（1872）年に開業し、石州街道を往来する人々が宿泊したが、開業時に建築されたのか、すでにあった建物を用いて開業したのかは定かではない。
当時の財界人の一人が旅館名「土生屋」から「こいしき」へと改名したと言われており、「恋」の字がいつごろから使われ始めたのかは不明である。時代の変化に応じて、当時の好みや流行を取り入れながら増改築を重ねており、明治、大正、昭和の各時代が重層していることが特徴である。犬養毅、井伏鱒二など多くの著名人が宿泊しており、田山花袋の小説「蒲団」には恋しき宿泊の記載がある。平成に入り、旅館としての役目を終えることとなったが、平成16（2004）年に登録有形文化財に登録され、現在は 離れ「まちなか交流亭-ku空u-」が営業を再開している。

見どころ

泉水、築山を配した本格的な和風庭園が大正初期に築造されている。造園に際して、禅宗の僧侶が主屋の三階から縄張りをしたと言われており、庭園を囲むように５棟の離れが点在し、それぞれに控室や茶室を付した趣のある景色を作り出している。
（離れ「明月庵」（ふじの間）のみ登録有形文化財に指定されていない）

「恋しき」を後世に残していくために、文化財でありながら現状にとらわれず、柔軟にリノベーションを繰り返してきた様子が、随所に見られる。このような保存活用方法は、時代の状況に合わせて再生していくことの大切さをしめしている。



平成19（2007）年と平成24（2012）年と２回に渡り、改修・再生事業が行われており、「府中の文化、社交の場を後世に残したい」という思いが形となりまちのシンボルであり続けている。

配置図と平面図

参考文献：中国地域のよみがえる建築遺産ー新たな生命を吹き込まれたレトロ建築の魅力（中国総研・地域再発見BOOKS）

建物名称	恋しき
建築年	明治初期
構造・様式	木造二階建、一部三階建
所在地	広島県府中市府中町178
電話	0847-41-5140
HP	http://koishiki-fuchu.com
開館時間	11:00～17:30（木・金・土）
アクセス	山陽自動車道「福山西IC」から車で約30分
備考	登録有形文化財

耕三寺潮聲閣

こうさんじちょうせいかく

広島県尾道市

書院造りを基調とした御佛間

潮聲閣は、耕三寺建立が初願される10年前の昭和2（1927）年、耕三師が36歳のとき、ご母堂の為に建築した壮大な住宅で、完成までに約５年の歳月を要した。潮聲閣の名称は、子爵三室戸敬光の撰で表玄関の扁額も子爵の筆になっている。母屋は木造・平屋・入母屋造・桟瓦葺（一部銅板葺）で、洋館は二階建て切妻造・洋瓦葺で車寄せ（ポーチ）が付属している。現在は耕三寺の重要な行事のときに使用されている。

本建物は和洋複合形住宅であり、広島県内でも数例が現存しているが、そのなかでも最も規模が大きく、かつ豪華な例がこの潮聲閣である。特に、日本住宅部分は、独創的で格式の高い書院造りの意匠が用いられ、折上格天井を多用することや名木をふんだんに使うなど、豪華さにおいても秀でており、昭和初期の住宅建築の最高傑作といえる。

見どころ

洋館と日本住宅を複合させた住宅建築は、一般的に洋館が表に位置し、その背後に日本住宅が配置されるが本建築では日本住宅のほうが正面にある。また正式な来客を迎える主室としての大広間よりも、ご母堂の居間である「老人室」のほうが豪華に作られているのは例のないことであり、耕三師の孝心によって造られた特別な住宅であることをよく表している。

潮聲閣の最高格式の座間である老人室

折上格天井で百二十四面の花鳥画が
帝展作家山下薫画伯によって書かれている

道路に面した洋館部の姿と見学で入れる和館の裏側勝手口

表玄関式台の天井

玄関の間

洋館部分の応接室

表玄関では式台を高欄付の廻り縁とし、玄関の間には一間半もの地袋付の付書院（室内側を華頭窓にし、外側に高欄付の小さな廻縁を設ける）その天井には畳大の一枚板を使い畳割と同じように配置されている。

参考文献：書院潮聲閣パンフレット

建物名称	耕三寺潮聲閣
建築年	1929（昭和4）年
構造・様式	木造
所在地	広島県尾道市瀬戸田町瀬戸田553-2
電話	0845-27-0800
HP	http://www.kousanji.or.jp/
開館時間	10:00～16:00（年中無休）
アクセス	しまなみ海道「生口島南IC」から車で13分
備考	国登録有形文化財

長府毛利邸

ちょうふもうりてい

山口県下関市

長府毛利邸は、長府毛利家第14代当主・毛利元敏公により明治36（1903）年に完成した邸宅。城下町長府にあり、近くには功山寺、乃木神社などがあり、まちなかには長屋門や土塀が残っており、当時の風情を今に残している。
武家屋敷造りの母屋は、書院、明治天皇ご宿泊の間、居住空間であった室が残されている。玄関土間部分の天井は格天井、正面には鶴が描かれた板戸があり反対側には雉の絵が描かれている。中庭を囲むように部屋が配置されており、その反対側は庭園に面しているため、風通しがよく、季節の移り変わりを感じられる気持ちのよい空間となっている。庭に面したガラス障子は、歪みのあるガラスで和の趣が感じられる。

正面玄関

庭から見た居住空間

見どころ

長府毛利家の家紋は「一文字三星」と「抱沢瀉」を定紋とし、他に替紋として「菫」「五七桐」「十六菊」を用いた。その家紋をデザインした釘隠。

書院造りの床の間。違い棚と窓枠の意匠も落ち着いた雰囲気。
天井高は3m。廊下や前室に面した欄間は障子欄間になっており、庭から庭へ風が通るようになっている。部屋と部屋の欄間は各部屋装飾が違い美しい。子供部屋の欄間は松竹梅。

書院庭園は白壁に囲まれ、濡れ縁からの飛び石の配置、手水鉢など、庭自体に風格がある。畳敷きの書院前室に座り、庭を眺めていると、時の流れがゆっくりと感じられる。

居住空間であった家族の室は池泉回遊式庭園に面しており、回遊式庭園の奥には枯山水が配してある。
回遊を意識し作られているため、石橋や石段などが配置されている。いろいろな眺望を楽しみながら散策できる。池の奥から眺める毛利邸も美しい。

建物名称	長府毛利邸
建築年	1903（明治36）年
構造・様式	木造平屋建　武家屋敷造
所在地	山口県下関市長府惣社町4-10
電話	083-245-8090
HP	http://s-kanrikousha.com/mouriteitop.html
開館時間	9:00～17:00（12月28日～1月4日休館）
アクセス	JR下関駅からバス23分「城下町長府」徒歩10分
備考	

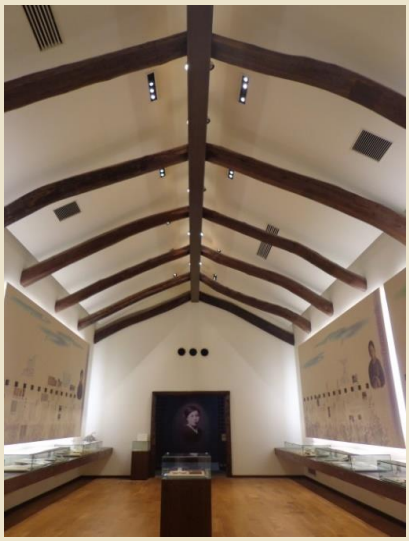
金子みすゞ記念館

かねこみすずきねんかん

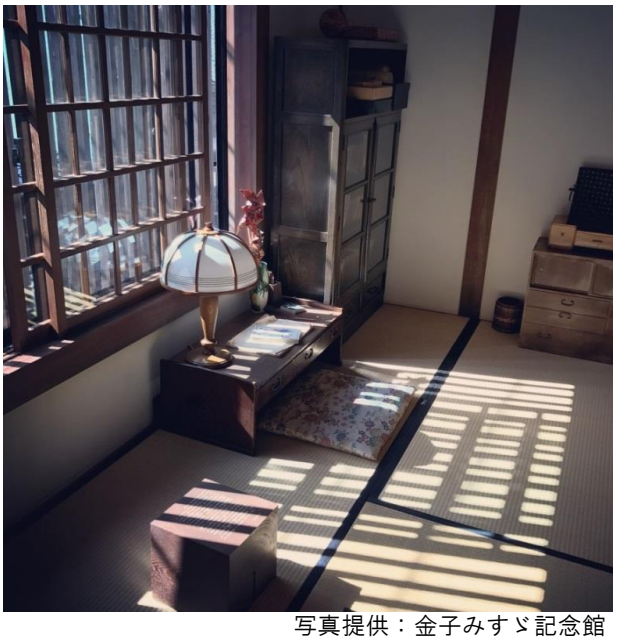
山口県長門市

金子みすゞは、山口県出身の童謡詩人。
記念館は、「本館」と「金子文英堂」からなる。
「金子文英堂」は、金子みすゞの実家である書店を当時の場所に再現したもので、みすゞが童謡を書き始める前の子供時代を過ごしたところ。
表の書店から裏の庭まで、通り土間がある商家のつくり。庭を囲む形で風呂、便所があり、土間の台所と風呂の間に井戸のポンプがありどちらにも使えるように吐出口が回るようになっていた。
通りの雰囲気も昔ながらの風情が残っており、再現された大正時代の書店がなじんでいる。

見どころ



当時、文英堂の隣に造り酒屋があり、裏手に蔵があったことから、記念館は蔵をイメージしたつくりになっている。
梁や入口に古材が使われていて、梁の迫力は圧巻である。



写真提供：金子みすゞ記念館

文英堂二階のみすゞの部屋。格子窓から通りをながめ、行き交う人々、仙崎の潮風、移ろう季節を感じながらすごしたであろう、みすゞの温かいまなざしをうかがい知ることが出来る。この日々の感覚、感情が後の作品に影響していることが感じられる居心地の良い和室。
当時の木製家具が再現されており、木のあたたかみと畳の良い香りが、どこか懐かしい、心の落ち着く空間である。

書店から奥をながめる。ふすまをあけ放つと庭が見え奥までひとつづきの部屋となる。

建物名称	金子みすゞ記念館
建築年	2003（平成15）年（大正時代の建物を再現）
構造・様式	木造二階建　　鉄筋コンクリート平屋建
所在地	山口県長門市仙崎1308
電話	0837-26-5155
HP	http://www.city.nagato.yamaguchi.jp/site/misuzu/
開館時間	9:00～17:00（12月29日～1月3日は9:00～16:00）
アクセス	JR仙崎駅から徒歩5分
備考	

山口市菜香亭

やまぐちしさいこうてい

山口県山口市

写真提供：山口市

山口市菜香亭は、八坂神社境内に料亭菜香亭として1877（明治10）年に創業し、1996（平成8）年まで営業を行っていたものを、2003（平成15）年に移築復元した文化施設。
現在残っている建物は、1887（明治20）年から1936（昭和11）年の間に増改築された部分。床面積は、約1,000㎡。
菜香亭は山口の迎賓館として使用され、歴史的人物や歴代の総理大臣も訪れており、直筆の書が飾られている。
大豆の御汁で磨かれたという黒光りする廊下や、ゆがみのあるガラスなど和風建築の良さを今に残している。
庭は大正時代の池泉観賞式庭園を移築している。

見どころ

大広間の床の間へ向かって右側には板の間の縁側、左側には畳敷きの縁側があり、それぞれ、庭に面している。ゆがみのあるガラス越しに、季節の風景を望むことができ、まるで絵画のようである。
窓ガラスは、1926（大正15）年にベルギーから輸入されたと思われるフルコール法によるガラス。

大広間より中庭と客間棟を見る

写真提供：山口市

約150畳の大広間。歴史的人物の法要や祝宴が催された。戦後はここで結婚式が行われた。
床の間は、1926（大正15）年、1936（昭和11）年、二時代の意匠を再現しており、床脇に違い棚がなく、床柱の柱身中央部を切り取る形。
大広間のスパンは7,760mmもあり、木トラスが組まれている。建材は一部に明治時代の物をそのまま使用している。大広間は、明治26年ごろ、明治36年ごろ、大正15年ごろに増築を重ねており、その時代によってトラスが技術的に進歩している。その様子を検証できるよう、一部天井がガラス張りになっている。
当時の円卓や食器などが残っており、歴史が感じられる空間である。

建物名称	山口市菜香亭
建築年	1887（明治20）年から1936（昭和11）年 2003（平成15）年移築復元
構造・様式	木造二階建（補強の為一部鉄骨有）
所在地	山口県山口市天花１丁目２番７号
電話	083-934-3312
HP	https://saikoutei.jp
開館時間	9:00～17:00（火曜日休館、休日の場合はその翌日 12月29日～1月3日休館）
アクセス	JR山口駅からバス「野田学園前」徒歩２分

旧毛利家本邸

きゅうもうりけほんてい

山口県防府市

旧毛利家本邸として、1916（大正5）年に庭園とともに完成。ほとんど当時のまま残されおり、国の重要文化財に指定されている。
江戸時代の大名家の御殿建築の流れを汲みつつ、近代的な建築手法を巧みに取り入れているのが特徴。柱梁などの構造材は木曽ヒノキ、板戸は屋久杉、また、階段は段板ではなく、ヒノキの一本物がもちいられるなど、厳選された素材とそれらを活かす技術が格式高い邸宅を作り上げている
一階の天井高、階高が高く、二階の窓からは、瀬戸内海を借景に広大な池泉回遊式庭園と防府の街を望む。大正期のガラスを随所に使い、風通しがよく、心地の良い空間。
設計・監督は毛利家専属の建築技師原竹三郎、作庭は佐久間金太郎。建物は合わせて12棟、敷地面積は84,000㎡に及ぶ。

二階からの景色

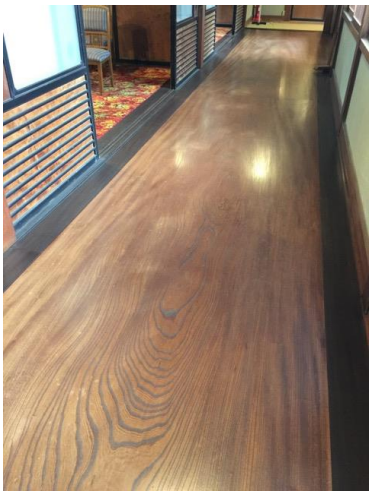
見どころ

一階客室のシャンデリアは特注のドイツ製。高い天井で違和感なく、和風建築にとりいれられている。毛利家の家紋である「長門沢瀉」がデザインされている。

二階客室のシャンデリア。一階応接間や廊下、食事の間などすべてデザインを変える演出がみてとれる。
全て当時のもの。

一階の大広間は、最も格式の高い部屋で、折り上げ格天井にシャンデリアのライトも５つと豪華な仕様になっている。当時はすべて邸内の自家発電でまかなっていた。

家紋「長門沢瀉」をさまざまな意匠に工夫した釘隠。



玄関から応接間へつづく廊下及び応接間は、木目の美しい台湾ケヤキの一枚板が敷き詰められている。（写真左：一枚板の廊下）
また、接客、居住の表の空間、家政を支える裏方の空間がきちんと分けられており、表の空間の廊下はすべて畳廊下、裏方の空間は、すべて板廊下である。（写真右：庭園に面した畳廊下）
壮大にして落ち着いた雰囲気の近代建築遺産としても貴重な空間である。

建物名称	旧毛利家本邸
建築年	1916（大正5）年
構造・様式	木造二階建　書院造
所在地	山口県防府市多々良1-15-1
電話	0835-22-0001
HP	http://www.c-able.ne.jp/~mouri-m/
開館時間	9:00～17:00（12月22日～31日休館）
アクセス	JR防府駅から約2.5キロ（車で約8分）
備考	重要文化財

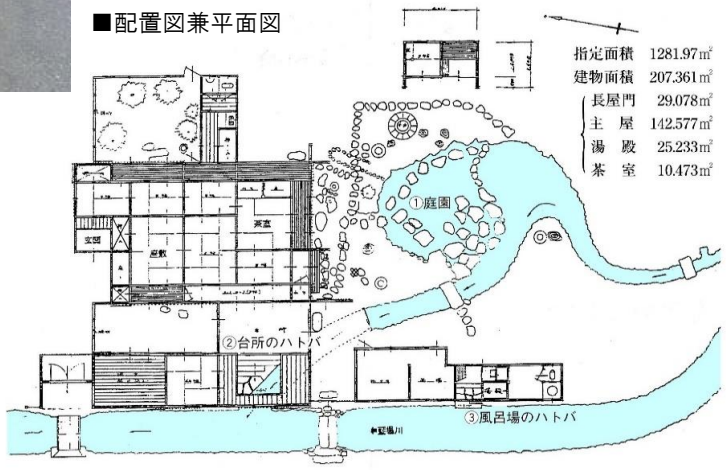
旧湯川家屋敷

きゅうゆかわけやしき

山口県萩市

旧湯川家屋敷は、藍場川の最上流にある藩政時代の武家屋敷。藍場川は、江戸時代に萩市の中洲に用水路として開削された人工の川で、その水は生活用水としても利用されていた。屋敷は川沿いから長屋門、主屋、離れで構成され、主屋には、玄関・座敷と茶室などがあり、特に茶室回りの意匠が優れている。平成の初めごろまで代々湯川家の住まいであったが、平成5年に萩市に寄贈され、史跡として保存、一般公開されている。
屋敷内へ続く水路では、沢山の鯉が泳ぎ、庭園は、すすき・椿・梅・オガタマ・つわぶき…自然豊かな癒しの風景が広がる。
長屋門の外壁には、舟板（和船の廃材）が使用されている。

■配置図兼平面図



（出展：旧湯川家屋敷パンフレット　発行：萩市）

見どころ

この屋敷の一番の特徴は、随所に藍場川の水が利用されていることである。まずは藍場川の水を引き入れて造られた池泉庭園。更に水は、池から建物の下を潜り台所へ流れる。台所には、水面に近づく為の石段が設けられており、屋内に居ながら川の水を汲んだり、野菜を洗ったりすることができる。このように川の水を生活用水として利用する為に造られた石段は、萩では「ハトバ」と呼ばれている。風呂場にある小さな「ハトバ」には囲いが設けられており、雨に濡れずに水を汲むことができる。洗い場の床の花崗岩の敷石には溝が加工され、ここから藍場川に排水される。庭だけでなく屋内にも川の「流れ」を取り入れた建築である。

■台所の「ハトバ」

■風呂場の「ハトバ」

↑洗い場の排水溝

主屋の茶室は四畳半で、床柱は松、落し掛けは丸みをつけて塗廻して仕上げてあり、書院窓は横子が吹寄せの意匠となっている。離れの待合は二畳のスペースで床柱はコブシ、踏込床で狆潜りが設けてある。各所に設けられた手水鉢も粋。蘭引（蒸留器）などの調度品も見応えがあり、当時の湯川家の茶道への造詣の深さが伺える。茶室からは美しい庭園が眺められる。

■茶室から庭園を望む

■茶室の意匠

■待合の意匠

■手水鉢

■蘭引

建物内には、湯川氏より建物と共に萩市へ寄贈された湯川家ゆかりの鎧や槍、文化人の書や掛け軸も展示されている。

建物名称	旧湯川家屋敷
建築年	江戸時代
構造・様式	木造平屋建　武家屋敷
所在地	山口県萩市川島67
電話	0838-25-3139（萩市観光課）
HP	萩市観光協会公式サイト
開館時間	9:00～17:00（無休）
アクセス	「藍場川入口」バス停より徒歩約10分
備考	萩市指定史跡、近隣に桂太郎旧宅あり

茶室 芳松庵（防府天満宮）

山口県防府市

ちゃしつ ほうしょうあん（ほうふてんまんぐう）

防府天満宮は、太宰府天満宮・京都北野天満宮と並ぶ「日本三大天神」のひとつとされている。菅原道真公はお茶に関する故実を調査・研究され世間に喫茶の習慣を広め「茶聖」と称された。菅公とお茶の深い関わりを後世に伝えるため、また茶の文化を通じて茶と人との日常的なつながりを深めたいとの主旨に基づき、研修の場を兼ねた茶室 芳松庵を建設。
（設計は日本建築の第一人者 大江宏氏）
建物は現代和風の母屋と伝統的な茶室（芳松庵）を「流れ」として設けた池を渡る廊下で結んでいる。母屋は木造部分と、茶会用の30畳大広間を含むＲＣ造部分が一体となり、違和感なく複合されている。
四季の移ろいを楽しめる庭園は、訪れる者の心を癒やし、季節により変わる景色を楽しませてくれる。

見どころ

どの部屋も見上げると、細部までこだわり抜かれた天井や欄間、鴨居の装飾を見ることができる。

■大広間(10畳)の天井

■２階広間(６畳)の天井
蒲編み光天井　中央部は杉透し彫り板

■広間(8畳)の天井

■『流れ』を渡る廊下

■四畳半の茶室

大広間のＲＣ造の壁の厚みによって生まれた空間は広縁や廊下との緩衝スペースとしてデザインされている。また間接照明の柔らかな明るさで大広間だけでなく、庇や庭までを全体の空間に包み込む温かみを感じさせてくれる。そして鴨居の吊り束には両面木目が美しく出るよう浮彫ではなく彫り込みで装飾が施されている。ひとつひとつ手作業で丁寧に造られており目を引く美しさである。二階の６畳の和室からは季節を感じられる美しい庭園を望むことが出来る。

■大広間と広縁

■二階和室から庭園を望む

■吊り束の装飾

建物名称	茶室 芳松庵（防府天満宮）
建築年	1991（平成3）年
構造・様式	RC造+木造 二階建
所在地	山口県防府市松崎町１４－１
電話	0835-22-0214
Ｈ Ｐ	hofutenmangu.com
開館時間	9:30～16:00
アクセス	「防府天満宮」バス停より徒歩３分
備考	設計：大江宏建築事務所

酒庵「空」（下関酒造株式会社）

山口県下関市

しゅあん「くう」（しものせきしゅぞうかぶしきがいしゃ）

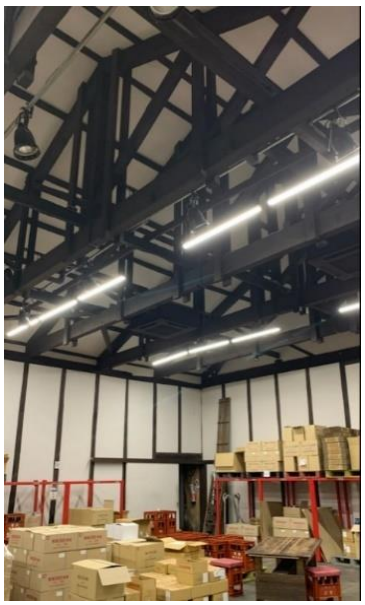
下関酒造株式会社は、1923（大正12）年、445人のコメ農家によって「地元に誇れる酒を造ろう」という思いから設立された。北浦街道沿いに建つ 酒庵「空」は、その創業当時に事務所として使用されていた建物で、「日本酒を若い人や女性にも身近に感じてほしい」という思いで、日本酒や酒かすなどを使用したメニューが楽しめるカフェとして生まれ変わった。
現しの小屋組は、建築当時のもの。土壁のクリーム色、壁の白と調和がとれ、和モダンな雰囲気で落ち着いた店内となっている。

見どころ

当時からある金庫はレンガ造（フランス様式）で作られており、現在はギャラリースペースとして使われている。
建物の表に煙突があり、こちらも創業当時のもので、金庫とは違い、イギリス様式で作られており、積み方を見比べることができる。煙突は先端を短くしたり鉄板を巻いたりと補修を繰り返しながら保存されてきた。

フランス様式
（フランドル積）
最もレンガらしく美しい積み方。

イギリス様式
フランス様式より丈夫で構造物に多い積み方。



創業当時の酒造場は大空間を支えるトラス構造の小屋組みが圧巻である。現在は、酒蔵まつりやイベントに使用されるホールに改装されている。
また、当時の仕込み蔵は現在も貯蔵庫として使用されており、こちらは和小屋組で造られている。
この二つの建物は、立派な梁と当時の職人さんの技術が見られる貴重な建物であるが、残念ながら、今は、見学が出来なくなっている。

地元の人々に愛されている会社であり、建物であることが感じられるほっとする和の空間、景色である。
煙突は老朽化が進んでいるため、今後の維持は難しいかもしれない、今こうして残っていることが嬉しい。

建物名称	酒庵「空」（下関酒造株式会社）
建築年	1923（大正12）年
構造・様式	木造　レンガ造
所在地	山口県下関市幡生宮の下町8-23
電話	083-252-0009
HP	https://www.kuu.world
開館時間	10:00～17:00（ｵｰﾀﾞｰｽﾄｯﾌﾟ16:30・水曜休）
アクセス	JR幡生駅から約1km（徒歩約15分）
備考	

長岡家住宅

ながおかけじゅうたく

徳島県三好市

長岡家住宅は、三好市東祖谷落合集落の重要伝統的建造物群保存地区内にある伝統的建造物（特定物件）の一つで、中腹からやや下腹に位置しており、標高約610mの南斜面に建つ。建築年代は、棟札が残っており明治34（1901）年である。当初は同地区内にある喜多家の分家として建築された。脇土居あるいは西土居と呼ばれ、落合集落でも上層農家であったといわれている。
当家は、木造平屋建、茅葺の寄棟造で、外壁は、土壁を保護するため、竹を火で炙ってから割ってつぶした（ひしゃいだ）ものを張るという、祖谷地方に古くから残る工法の「ひしゃぎ竹」で仕上げられている。
上層農家であったためか、間取りは食違六間取で、祖谷の民家特有のオモテに相当する部屋がなく、かわりに書院と床の間を備えた座敷がある。土間が極めて小さく、通常は平側に設けられる前便所が妻側にあるなど、この地方の他の民家とは多くの点で異なっている。農業だけでなく来客も意識した格式の高さが分かる貴重な建物である。

見どころ

長岡家住宅の茅葺の大きな寄棟と、この地方に古くから残る「ひしゃぎ竹」で仕上げた外壁は、祖谷地方特有のものである。平側に長く伸びる縁側に座り、対岸を眺めてのんびりするもよし、中で板間やタタミに座りゆっくりするもよし。見どころというより、居どころと言った方がしっくりくるそんな建物である。
建物だけでなく、対岸から眺めてみたり里道を歩いたりして、集落をじっくりと楽しんでもらいたい。

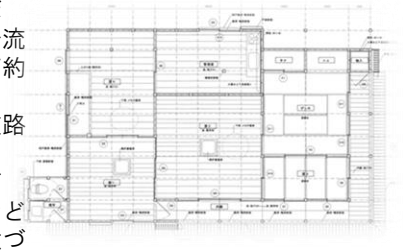
ザシキ

囲炉裏部屋

イモ穴

新緑の落合集落

落合集落は、県西部東祖谷のほぼ中央にあり、祖谷川と落合川の合流地点より山の斜面に沿って、東西約750m南北約850mに広がる。
斜面を蛇行しながら上に向かう道路沿いに民家が点在している。
集落内を東西南北に走る里道や石垣、田畑、森、そこで住む人々などすべてのことが、この集落を特徴づけている。



長岡家住宅　平面図

対岸の中上地区にある展望所からほぼ全景を一望することができる。集落内には、一棟まるごと貸し切りできる茅葺きの民家が８棟あり、宿泊体験ができるほか、地場産食材やジビエを使った料理を楽しめる古民家レストランもある。

対岸の展望所から見た落合集落

建物名称	長岡家住宅
建築年	1901（明治34）年
構造・様式	木造平屋、寄棟造、茅葺
所在地	徳島県三好市東祖谷落合
電話	0883-72-3910（三好市文化財課）
HP	www.miyoshi.i-tokushima.jp（三好市）
開館時間	9:00～16:00（定休：毎週水曜日）
アクセス	車：井川池田IC下車　1時間30分 バス：四国交通「鎖谷」下車　徒歩15分
備考	重要伝統的建造物群保存地区内(特定物件)

出羽島の民家

てばじまのみんか

徳島県海部郡牟岐町

港から集落を望む

出羽島は、牟岐港沖約3.7kmに位置する海岸周囲距離約３kmの小さな離島である。島の北部には砂嘴（サシ）に囲まれた入り江があり、入り江に沿って集落が形成されている。島内には自動車の乗り入れは出来ず、アワエと呼ばれる路地が縦横に巡らされ、今でも手押し車が主な運搬手段として利用されている。集落の歴史は1800（寛政12）年に藩令による移住が開始されたことに始まり、江戸時代後期から昭和前期にかけて漁業の隆盛とともに集落も拡大・発展した。島の歴史は常に漁業と共にあり、現在も約70人の島民が漁業を生業として静かな島の暮らしを営んでいる。島への交通手段は、牟岐港から出港する定期船のみであり、高度経済成長期の開発の波にさらされることなく、近世から昭和にかけて形成された伝統的漁村集落のたたずまいをを現在に伝えている。島にはゆったりとした時間の流れがあり、清浄な空気と温かな潮風に包まれてほかにはない特別な旅情を味わうことができる。

見どころ

出羽島は、平成29（2017）年2月に徳島県3カ所目の重要伝統的建造物群保存地区に指定された。漁村集落としては国内２例目である。現存する建物群には建造された時代ごとの特徴が見られ、多様な建築様式を縦覧できる貴重な場所となっている。時代が進むにつれて平屋からつし二階・中二階・本二階と軒高が高くなる傾向があり、また最も特徴的な建築要素として平入り主屋の正面に設けられたミセ造り(上部蔀・下部床几)や出格子をみることができる。ミセ造りは四国東南部のみに見られる稀少な建築部品で、荒天時には雨戸として使用された。島全体が伝統的漁村集落の佇まいを現在に伝える貴重な文化遺産となっている。島の交流施設として復原された民家『波止（はと）の家』は事前申込みをすれば内部も見学可能である。

交流施設『波止(はと)の家』
手前に手押し車が見える

『波止の家』内部
通り土間を潮風が吹き抜ける

出羽島全景

もっとも特徴的な建築様式である「ミセづくり」と「出格子」をもつ民家。持送りには、家ごとにさまざまな意匠がこらされている。ミセは漁網の繕いや魚を捌く作業台として利用され、時には近所の人との談笑を楽しむ縁台となった。

建物名称	出羽島の民家
建築年	江戸時代後期～昭和初期
構造・様式	木造平屋・つし二階・中二階・二階建等
所在地	徳島県海部郡牟岐町牟岐浦
電話	0884-72-0107（牟岐町教育委員会）
HP	tebajima.jp
アクセス	牟岐港から定期連絡船で15分 牟岐港へはJR牟岐駅から徒歩8分
備考	重要伝統的建造物群保存地区

吉田家住宅

よしだけじゅうたく

徳島県美馬市

吉田家住宅は、吉田直兵衛が寛政4（1792）年に創業した藍商家である。藍商とは、幕末から明治にかけて繁盛した藍染めの原料を販売する商人をいう。建物は、重要伝統的建造物群保存地区「うだつの町並み」に面していて、間口11間・奥行き30間の広大な敷地を有し、母屋・質蔵・藍蔵など５棟が中庭を囲むように建っている。家屋は、本瓦葺きに大壁造りの重厚なたたずまいで、隣家と接する二階の妻壁に卯建を設けている。建物裏手には雁木石段があり、かつて吉野川が近くを流れていたときの名残で、降りてすぐの所が舟着場になっていた。また、家屋の中には、商談に使ったみせのまや帳場があり、使用人部屋や藍蔵、藍寝床なども残されている。移築として建てられた後、江戸後期から慶応元(1865)年までの約90年間に、３度に亘る大規模な改修を行ったと記録されている。現在は一般公開されており、建築様式の素晴らしさや藍商の暮らしぶりを見ることが出来る。

見どころ

商家の密集する市街地で、人々がもっとも恐れたのが火災である。江戸時代に入ってから、たびたび大火に見舞われた美馬市脇町では、家屋の防火構造が重視され、卯建（うだつ）や虫籠窓（むしこまど）などが造られるようになった。卯建は、隣家と接する二階の妻壁から突き出した、本瓦葺・漆喰塗の小さな袖壁で、延焼をくい止める役割がある。虫籠窓は、表面に練り土・漆喰を塗り込めて堅牢に固めた二階部分の窓で、窓から室内へ火が燃え移るのを防ぐ役割がある。卯建は、作る費用が相当に掛かったことから「うだつがあがる・うだつがあがらない」という、ことわざの語源にもなっている。

重要伝統的建造物群保存地区「うだつの町並み」は、幕末から明治期まで藍商をはじめ多くの商家が建ち並び、たくさんの人々で賑わっていた。現在は、明治期のものを中心に、江戸中期から昭和初期の85棟の伝統的建造物が建ち並んでおり、近世・近代の景観がそのまま残されている。この町並みの大きな特徴は、町家の両端に卯建がみられることであり、このことから「うだつの町並み」の通称で親しまれている。近年では、古民家を活用したセレクトショップやカフェ、ゲストハウスなどがオープンし、毎年「うだつまつり」が開催されている。

建物名称	吉田家住宅
建築年	1792（寛政4）年
構造・様式	木造二階建・本瓦葺
所在地	徳島県美馬市脇町大字脇町53
電話	0883-53-0960
HP	https://www.city.mima.lg.jp/kanko/map/list/11507.html
開館時間	9:00～17:00（最終入館16:30）
アクセス	徳島市内より車で約40分、脇町ICより車で約10分
備考	重要伝統的建造物群・美馬市指定有形文化財

藍の館

あいのやかた

徳島県板野郡藍住町

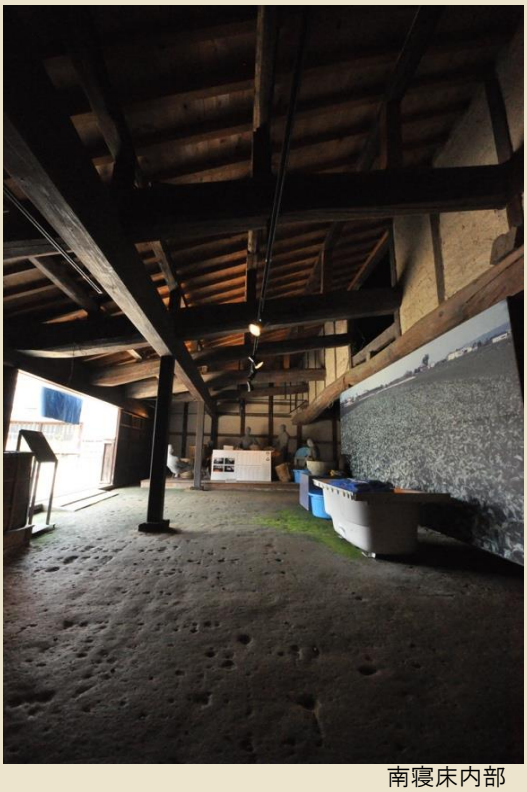
主屋。寝床が囲む中庭では藍こなし作業が行われていた。

奥村家は、文化年間から明治にかけての阿波藍の最盛期における藍師・藍商の屋敷であり、その建築群がほぼ完全に保存されている。
主屋は、広い敷地北寄り中央に南面して建ち、これを囲むように県下でも遺構の少ない奉公人部屋、南と東西に３棟の寝床(ねどこ)、贅を尽くした西座敷、北・中・南の各土蔵、湯殿便所など13棟が建っている。

主屋内部　ミセ、中ノ間、オモテ座敷と続く

見どころ

主屋は間口19.8m、奥行9.9m、入母屋本瓦葺二階建てで、棟札によって文化5(1808)年に建立されたこと、また、文政10（1827)年に二階を継ぎ足す大増築されたことがわかっている。主屋奥（北）の離座敷は西座敷に劣らず凝った造りの数寄屋風で、特に二階はいたるところに意匠が工夫されている。
西座敷は、入母屋本瓦葺の平家建数寄屋造で藍取引の接待用に使用された。本書院付きの床の間を設けた上の間十畳と下の間十畳の続き間が三方縁側で囲まれている。続き間は可動式敷居を部屋の端へ持ってくると継ぎ目のない一室となる。
三棟ある藍寝床は葉藍の寝かせ込み作業を行った加工場で、藍こなし作業場の内庭に全て面している。軸部は柱を半間おきに立て、壁は大壁にして腰はササラ子下見板張り、上部は漆喰塗とし、防火断熱や耐震性を高めている。二階床は太い骨組みの架構の上に、真竹を敷きつめた上にむしろを敷き三和土仕上げで、小屋組は登り梁と重ね梁の併用である。西寝床の規模は、間口16.3m、奥行6.3mで、木造切妻造本瓦葺二階建である。引用「徳島の文化財[建造物]」(一社)徳島県建築士事務所協会



南寝床内部

前面道路より見る、左から西寝床、南寝床、大門、番屋

大門、南寝床

東寝床

西座敷内部

東寝床内部、藍染体験ができる

建物名称	藍住町歴史館 藍の館
建築年	〈主屋〉1808（文化5）年
構造・様式	〈主屋〉入母屋造本瓦葺二階建　他12棟
所在地	徳島県板野郡藍住町徳命字前須西172
電話	088-692-6317「藍の館」（一社）しじゅうはちがん
HP	ainoyakata.jp
開館時間	9:00～17:00 休館日火曜（祝日は開館）12月29日から1月3日
アクセス	JR徳島駅から徳島バス（鍛冶屋原線）奥野停留所下車、徒歩約10分
備考	徳島県指定有形文化財建造物

阿波池田うだつの家・たばこ資料館

徳島県三好市

あわいけだうだつのいえ・たばこしりょうかん

うだつの家　正面

うだつの家（旧真鍋家住宅）は、三好市池田町本町通のうだつの残る町並の中央に位置する。敷地は本通りから谷町通りまで達した広さで、その中に、主屋、離れ、渡り廊下の奥にはたばこ蔵、工場が配されている。
主屋は、木造二階建、切妻造本瓦葺、建築年代は明治後期とされる。階上に寄棟のうだつが両側に上がっている。通りに面した壁は黒漆喰で塗られ、１階には細格子、２階には虫籠窓が設けられている。中に入るとミセと座敷があり、そこから中庭を囲むようにして、東側に渡り廊下が伸び、西側には離れが建つ。離れは平屋建、入母屋造本瓦葺、建築年代は大正15（1926）年との記述が残る。雨戸の戸袋には欅の一枚板が使われ、内側にガラス戸を填め、中庭を眺めることができる。茶室とした10畳が２間並び、天井には屋久杉の板を貼り、書院を構えた床の間には堅木がふんだんに使われており、贅をつくした造りとなっている。奥のたばこ蔵と工場は２階建、大壁造とし、蔵の小屋組は太物を使った合掌造としている。

見どころ

離れ　床の間

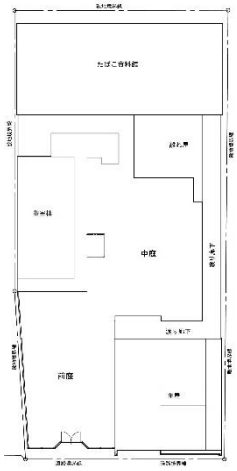
離れ　廊下

離れ　釘隠し（松竹梅）

離れ　雨戸戸袋

たばこ蔵　小屋組み

阿波池田は、隣の井川町辻町と並び幕末から明治38（1905）年の官営になるまで刻みたばこ製造業で繁栄したまちである。当家は、真鍋武蔵によって万延元（1860）年に起業し、初めて蒸気機関の刻み機を採用したとされる。
現在は、たばこ産業繁栄の象徴とし、平成８（1996）年7月1日、三好市指定有形文化財に指定され、旧工場部分は、阿波池田たばこ資料館として、刻みたばこに関する資料を展示し一般公開している。また、生涯学習の場として運営し、活用を図っている。
阿波池田のうだつの残る町並みには、登録有形文化財の建物が数多くあり、ジオガイドによるツアーなども企画されている。



配置図

渡り廊下と中庭

建物名称	阿波池田うだつの家・たばこ資料館
建築年	推定　明治後期
構造・様式	木造二階建、切妻造、本瓦葺
所在地	徳島県三好市池田町マチ2465-1
電話	0883-72-3450
HP	www.miyoshi.i-tokushima.jp（三好市）
開館時間	9:00～17:00　休館日水曜、12/28～1/4
アクセス	JR：阿波池田駅下車徒歩10分 車：井川池田ICから約５分
備考	うだつの家　入館無料

犬飼農村舞台

いぬかいのうそんぶたい

徳島県徳島市

公演風景

江戸時代から庶民の娯楽の花形だった歌舞伎や人形芝居は、戦前まで全国いたる所で盛んに上演されていた。集落には必ず神社が有り、その境内にそれを演じる芸能施設として常設の建物を持つものも多い。これを「農村舞台」と呼び人々に親しまれ愛されてきた。当時阿波藩の領地であった淡路島で生まれた人形芝居は、阿波徳島で最も栄え、舞台の数も昭和42(1967)年の全国調査で確認された1,338棟のうち徳島県209棟と15.6%を占め全国一を誇った。その内訳は1,122棟が歌舞伎、残り216棟が人形芝居のための舞台であり、徳島はそのほとんどの208棟が人形舞台であり全国の96%を占めていた。しかし、戦後の映画やラジオ、テレビの普及で忘れ去られ、集落の過疎化も拍車が掛かり舞台減少が急速に進んだ。平成4(1992)年、徳島県建築士会阿波のまちなみ研究会の悉皆調査により136棟を確認、その後農村舞台の保存と活用を目的としたNPO法人阿波農村舞台の会が発足、平成19(2007)年会の調査では100棟に減少していた。犬飼の農村舞台は県下の農村舞台の代表格で、毎年11月3日には人形芝居と襖カラクリの上演が行われる。

見どころ

構造：木造平屋で、舞台内部左右に正面、両袖それぞれから１間の位置に大臣柱が設けられて、人形芝居上演時に背景の襖建込み用の敷鴨居の取り付けや、本手の手摺取り付け用として重要な役目を負う。

屋根形式：茅葺寄棟で小屋架構は扠首組。ただし屋根裏まで竹に吊った襖を釣り上げて納まるように中央部だけ梁を切ってカラクリへの工夫をしている。太夫座は瓦葺切妻、背面増築部はトタン葺切妻。茅葺の舞台は那賀町坂州とここ犬飼の２棟のみ残されている。

舞台の機構

歌舞伎舞台に付きものの廻り舞台は無く、人形芝居独特の装置を持っている。大臣柱もそのためのもの。

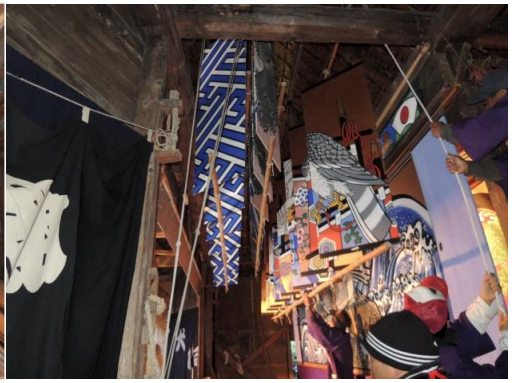
●**太夫座**：舞台上手に一段高く斜めに迫り出した太夫座（語りの太夫と三味線弾きの席）があり、これが人形舞台の特徴となる。

●**カラクリ機構**：襖絵による舞台背景の転換装置で、何重もの敷鴨居に入れた襖を引抜くなどするほか、襖の中心に回転軸があり、裏表の絵を瞬時に回転して替える田楽など、犬飼はカラクリ自体を見せ物「千畳敷」として上演している。132枚の襖は、泥絵の具で42景の色々な花鳥風月や模様が描かれ、変化の方法は引き分け、行き違い、チドリ、回転（田楽返し）、上昇など巧妙なカラクリと奥へいくほど小さくするなどパースペクティブを強調して狭い舞台を深く見せ、最後には大広間の奥御殿の景が再現され、見る者を楽しませてくれる。

●**船底楽屋**：舞台床は４段になっており一番手前が二の手として地面位置が床となり、本手は一段高く、その奥がもう一段上がり千畳敷のカラクリ用敷鴨居を設置した上々段があり、奥へまた一段上がって奥千畳がある。上々段の下は地面を掘って舟底楽屋が設けられており、狭い場所での空間利用の工夫に感心させられる。

人形芝居上演風景

襖カラクリ用敷鴨居



田楽返しの襖は小屋裏へ瞬時に上昇

船底楽屋

襖カラクリ

建物名称	犬飼農村舞台
建築年	1873（明治6）年
構造・様式	木造寄棟茅葺、平屋
所在地	徳島県徳島市八多町八屋67-3　五王神社境内
電話	088-621-5417（徳島市教育委員会）
HP	https://www.awanavi.jp/spot/20402.html
開館時間	舞台公演開催日10:00～13:00
アクセス	JR徳島駅→徳島市営バス五滝行き（終点）→徒歩10分
備考	1998（平成10）年12月16日国指定有形民俗文化財指定

旧金毘羅大芝居

きゅうこんぴらおおしばい

香川県仲多度郡琴平町

旧金毘羅大芝居は、天保6（1835）年に建てられた、現存する日本最古の芝居小屋である。江戸時代中頃から金毘羅信仰が全国的に高まり、多くの参詣客で町は賑わいをみせていたといわれる。
年３回（３月・６月・10月）の「市立ち」の度に仮設小屋で芝居、相撲、軽業、操り人形などの興行が行われていた。
しかし、だんだんに門前町の形態が整ってくるにつれて常小屋の必要性と、また一方その設置を望む多数の庶民の声を反映し、天保6（1835）年、高松藩寺社方より許可を契機に、当時、大阪三座の一つ大西芝居（後の浪花座）の規模、様式、構造を模し、富籤（現代の宝くじのようなもの）の開札場を兼ねた常小屋として建てられた。
しかし、時代は移り変わり人々の娯楽の変化とともに近代以降、小屋は映画館と変わり小屋の内部なども様式を変えていった。所有者が変わるたびに芝居小屋の名称は「金毘羅大芝居」より「稲荷座」「千歳座」となり、明治33（1900）年に「金丸座」と改名した後は現在でもこの愛称で親しまれている。

見どころ

【かけすじ】　役者などが宙乗りするための装置。
【明り窓】　開閉することで場内の明るさを調整する。
【顔見世提灯】
興行の際、役者の番付の代わりをしている。
【ブドウ棚】
竹で編んだ格子状の天井。花吹雪も散らすことができる。約500本の竹を使用。

【花道】
舞台下手より直角に客席を貫き、鳥屋に通じている。
【すっぽん】　花道の七三の位置にある切穴のこと。
【廻り舞台】
舞台中央にある直径４間（7.3m）の円形に刳り抜き、回転させることができる舞台。
【セリ】
廻り舞台にあり、「スライド」式に奈落と舞台を上下できるようになっている。
【空井戸】
舞台と花道の付け根に構えた半間四方の空枠。舞台下の奈落に通じており、ここから出入りしたり、早替わりなどに用いられる。
【仮花道】　舞台上手より、直角に客席を貫いている。

興行が衰退し廃館となるが、江戸時代より現代に至るまで風雨に耐え火災にも遭うことなく、奇跡的に残った最古の劇場を後世に残すため保存運動が始まり、国内外の建築、演劇に携わる専門家も加わり、芝居小屋を訪れ専門的な調査が行われた。
昭和45（1970）年、歴史的、文化的価値が認められ「旧金毘羅大芝居」として国の重要文化財に指定され、昭和47（1972）年から4年間の歳月をかけ、昭和51（1976）年に現在の愛宕山中腹に移築復元された。
平成15（2003）年、復元及び耐震構造補強工事（平成の大改修）が行われた。調査の結果、天井裏全面に鉄骨で構造補強が施され、補強を施すことにより、大梁を支えていた四本の支柱を除去することが可能となり、本来の姿（江戸時代の内装）に戻された。併せて調査中に発見された痕跡を検証し、判明した「ブドウ棚」と「かけすじ」が復元され、より江戸時代の情緒あふれる姿に再現された。
昭和50（1975）年度の移築大改修以後、昭和60（1985）年から毎年「四国こんぴら歌舞伎大芝居」が開催され、四国路に春を告げる風物詩となっている。

建物名称	旧金毘羅大芝居
建築年	1835(天保6)年、1976(昭和51)年移築
構造・様式	木造 一部鉄骨/木戸、客席、舞台、楽屋等複合建造物
所在地	香川県仲多度郡琴平町乙1241
電話	0877-73-3846
HP	http://www.konpirakabuki.jp/index.html
開館時間	9:00～17:00 （年中無休）
アクセス	JR琴平駅・琴電琴平駅より車で5分、駐車場無し
備考	国指定重要文化財　1970（昭和45）年6月17日

渡邊邸

わたなべてい

香川県木田郡三木町

京阪にまで聞こえた数寄屋大地主、「揚家十茶室」より譲り受けた五室の茶室と伝承の「鯰魚庵」を合わせて名席六室をもつ大邸宅。

腰掛け待合いから見た雀巣庵

見どころ

渡邊邸は明治中期から昭和初期にかけて揚家より移築された五つの茶室を併せ持つ。そのこだわりたるや「揚家を語らずして讃岐の茶室を語るな」という言葉が残されるほど。屋敷の一番北側にあるのは三畳台目の「孤月」と二畳半の「白雲軒」。隣接する鯰魚庵の入り口を腰掛待合に見立てている。孤月には江戸初期の大名茶人である遠州の書いた「孤月」のぬれ額が鬼瓦下の破風にかかっていることでこの名があるのだそう。軒下には吉原灯篭。軒回りの垂木は北山杉。野地は黒部。柱は法隆寺の残木だそうで驚きである。内露地には織部焼のエメラルドグリーンの敷石があしらわれ、ふと目をあげると母屋との廊下には波模様のかげろう窓が美しい。天井は屋久島杉、竿は栗のなぐり、お点前天井はトクサ。縦がシナ紋竹、横が高野竹といった具合に細部にわたり、こだわりの逸品で構成されている。文献によると孤月は金比羅に抜け参りにきて揚家に滞在した表千家十一代碌々斎（ろくろくさい）が揚硯堂氏の求めに応じて自ら指揮して建てた名作だという。大変由緒深く、美しい建物であると共に、そこから醸し出される本物がもつ侘び寂びの素晴らしさが体感できる希少な建築物である。

写真右奥は櫛窓の席。にじり口の上に寒竹の櫛窓があるのでこの名が生まれている。長四畳逆勝手、かべ床、丸炉があるので「丸炉の席」ともいう。大茶人揚氏の「櫛窓の席」は通路を仕切って有効に利用するという間取りの妙を垣間見せてくれる。

狐月外観

内露地

狐月内部

建物名称	渡邊邸
建築年	明治中期（築約120年）～昭和初期(築90年)
構造・様式	木造数寄屋造
所在地	香川県木田郡三木町下高岡2569-1
電話	090-1572-7877（渡邊邸オーナー小橋様）
HP	http://www.watanabetei.net
開館時間	不定休 （要事前予約 mail : ayami@watanabetei.net）
アクセス	ことでん長尾線「白山駅」徒歩約7分
備考	

香川県文化会館

かがわけんぶんかかいかん

香川県高松市

外観

香川県の教育、学術、文化の発展に寄与するため、総合的な文化施設として開設された。設計は、戦後日本を代表する建築家大江宏氏。
玄関前の彫刻は、流政之氏作『おいでまあせ』

エントランスホール

見どころ

香川県文化会館は、鉄筋コンクリート造の近代建築の様式美に、館内の随所に檜、杉、松を取り入れ、日本建築の伝統美を融合させた建築である。50年を経た木の美しさが飴色となってすっかり馴染んでいる。特に４階部分（和室、茶室、談話室）は比較的伝統的な手法を基本とし、建築的な扱いは厳密に木造作構成の手法で統一している。
公共のオープンスペースでありながら、木の扱いをここまで部分・細部にまで厳しく追及したインテリアの構成は必見である。
大江宏氏は新建築の中で、明治以降公的な生活の場は「洋風」で進歩的、私的な生活の場は「和風」で退嬰的あるといった固定概念が社会通念となっていったが、どれをもって先進、どれをもって保守とするような格差優劣は本来存しえないという前提にたちもどり、異質の要素が混在する日本の現実をそのままに反映しようとするところに建築創造の意義を見出そうとしたと語っている。（混在併存）
見学の際は、細部の納まりや素材のこだわりに注目して堪能していただきたい。

３階芸能ホール

古さを感じさせずどこか時代を超越した存在感を漂わせている舞台は、能舞台をアレンジしたもので、上部の透かしは銀杏の模様になっている。南側の木の壁面は吸音と装飾を兼ねて鎬（しのぎ）という作り方。天井は、桐の格子天井に、正倉院裂の獅子狩り文様を模して龍村美術織物（株）が織ったものを組み合わせている。

４階和室

４階談話室（奥には和室が見える）

軒下は栂（つが）の木を使用。軒は、当初桧皮葺（ひわだぶき）だったが、後に銅板に改修している。
中央の炉は、周囲が大谷石で中に那智石が敷き詰められている。

建物名称	香川県文化会館
建築年	1965（昭和40）年
構造・様式	鉄筋コンクリート造・地下１階地上７階
所在地	香川県高松市番町1-10-39
電話	087-831-1806
HP	http://www.pref.kagawa.lg.jp/kmuseum/bunkakaikan/
開館時間	9:00～17:00
アクセス	JR高松駅から南へ1.5ｋｍ ことでん瓦町駅から西へ1.2ｋｍ
備考	近隣に駐車場（有料）有り

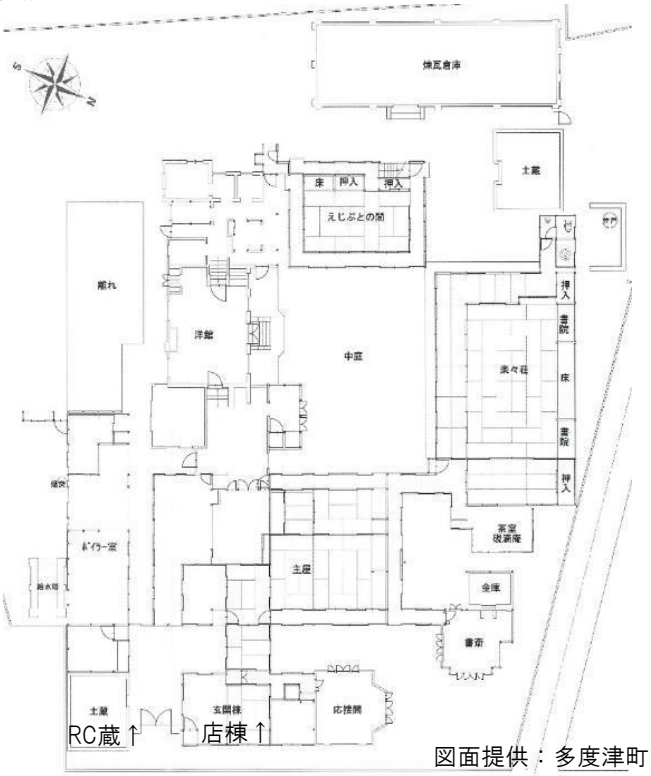
旧合田家住宅（島屋）

香川県仲多度郡多度津町

きゅうごうだけじゅうたく（しまや）

中心市街地「本通」に面した正門と出桁造の店棟

金毘羅参道の玄関口であり、北前船の寄港地として栄えた多度津町に位置し、「多度津七福神」と呼ばれた、実業家や貴族院議員を輩出した合田氏の邸宅である。
広い敷地内に大正から昭和初期にかけて建てられた計13棟の建物が現存する。



図面提供：多度津町

東の本通りに面してRC蔵・正門・中2階で黒漆喰塗り出桁造の店棟と洋風の応接室が並列する。
中央に位置する中庭を取り囲むように、主屋、大広間、洋館のゲストルーム、2階建ての離れを配し、家人とゲストが外部から隔離された私的空間を楽しめるよう趣向が凝らされている。
敷地南側には、ボイラー室や物置を備えた作業空間、西側には煉瓦倉庫、土蔵の収納空間といった、多棟建築ながら明確なゾーニングの敷地構成が成されている。

見どころ

伝統的な意匠を持つ店棟・主屋と近代和風的な意匠を備えた数寄屋風の書斎・大広間・離れの和館に加え、大正～昭和初期の意匠を持つ建築当時の先進的な工法であるRC造を地階部分に採用したスキップ・フロア形式の洋館、また個人の住宅としては珍しい大型の煉瓦倉庫等、多様な意匠の建築・構造物を楽しむことが出来る。

主屋と大広間を繋ぐ廊下や、中庭に接する広縁の天井は、隣接する室との調和が図られた様々な意匠が楽しめる。

離れの和館は、戸袋も含め、全面ガラス張り。２階の「えじぷとの間」は、明り障子、欄間にえじぷと文様が施され、妻折れ格天井の畳の間に異国の雰囲気が取入れられている。
中庭に面する広縁の意匠は、欄間、欄干、床共に幾何学模様で構成されている。糸ガラスで織りなされた欄間の匠さには目を見張るものがある。

ゲストルームは、木造中２階建の洋風建築。外壁はモルタルスタッコ塗りの壁にステンドグラスをはめ込んだ窓、装飾金物のついた暖炉用煙突及び軒先・けらばには装飾を施したブロンズのカバーモールを使用している。内部は、漆喰レリーフ格天井や大理石製のマントルピース、幾何学的な分割が見られるアールデコ調のステンドグラスなど、色彩豊かにコーディネイトされた特注の内装材が数多く使用され、贅を尽くした内容となっている。

漆塗りの折上げ格子天井を伴う大広間

北原白秋が「楽々荘」と命名した30畳の大広間。中庭を隔てて洋館と南北に対する。シャンデリアは合田家の家紋である片喰を金具に施した特注品。中央に２畳の畳床。床脇にはケヤキの一枚板を使用するなど、良質な木材が多用されている。

資料提供：合田邸ﾌｧﾝｸﾗﾌﾞ様・多度津

建物名称	旧合田家住宅（島屋）
建築年	大正～昭和初期（多棟建築による）
構造・様式	木造・RC造・煉瓦造等、入母屋造・切妻造等
所在地	香川県仲多度郡多度津町本通1-5-2
電話	0877-33-0700（教育委員会事務局生涯学習課）
HP	https://www.town.tadotsu.kagawa.jp/kanko_bunka_event/rekishi_bunka/2506.html
開館時間	事前問合せによる　R5～9年度緊急保全工事実施
アクセス	JR多度津駅から徒歩10分
備考	町指定有形文化財

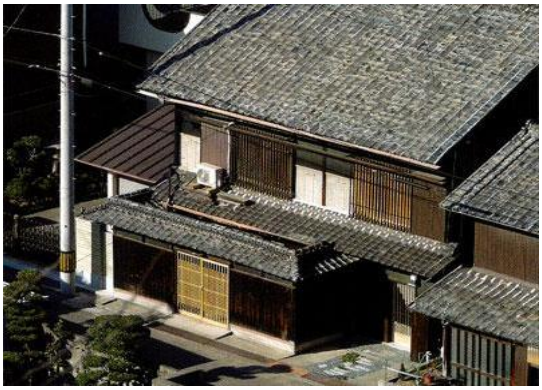
古民家ステイ 香露軒

こみんかすてい こうろうけん

香川県仲多度郡多度津町

玄関から眺める

かつての多度津町西浜は宿や銭湯、遊郭、桶屋、射的場などがあり、金毘羅街道の玄関口でもあることから多くの人が訪れた。香露軒は昭和初期頃まで料亭として使用していた。『香露軒』という名前は料亭時代からのもので、その板看板は今でも使用されている。



見どころ

二階は１０帖と４帖の続き間がある広間と６帖の和室が２つある。続き間の欄間には竹割りで装飾されている。基本的に各室共、天井・鴨居・柱に至るまで杉の糸目柾の仕様で見応えがある。広間にある床の間の床柱は丸柱で、付書院は細やかな格子と組子でできている。障子にも同じく細やかな仕事がなされており、障子の桟は１分厚で、意匠性がとても高い。窓面からは外の光を優しく室内へ入れてくれる。窓には中庭を見渡す事が出来る肘掛け欄干があり、とても風情がある。

階段のすぐ横に６帖の和室があり、他の和室には見られなかった節入りの柱が一本ある。このことから、客人は使用せず、芸子などの控え室として使用し、階段奥の渡り廊下を渡り、広間へと入ったと思われる。

一階・二階共に格式が高いわけではないが、遊び心のある意匠でつくられている。だが、細部にまで細かな仕様を取り入れており、当時この地域には無いであろう手法などが使われている為、お金をかけて作られていることが分かる。

広間の天井

階段

中庭

二階 主広間

多度津町は北前船の寄港地でもあり、江戸期から商人が行きかう港町として発展した。鉄道・銀行・電力の発祥地ということもあり、商人が裕福であり数多くの大邸宅や町家が存在した。現在は多くの建物がなくなったが、当時のままの姿を残している建物が比較的残っている。香露軒はその中の一つである。門を構えている町屋で大阪ではよくある建て方で、そのたたずまいから高級な町屋・屋敷の趣きのある町屋で、中西讃では珍しい建て方だと思われる。また、厨子二階（つしにかい：明治期に建てられた二階が低い建築）では無く、本二階の造りであることから、大正期から昭和初期に築造されたものではないかと思われる。

外観は二階の腰壁部分に塗りがあり、扇の意匠が施されている。近隣の建物もよく似た塗りがある建物がある。玄関から内部を眺めると、中庭が垣間見える。玄関奥の８帖和室は松梁を使用しており、天井は張られていない。細やかな造りではない為、家人が使用していたと思われるが、料亭であったことから待合としても使用していたと思われる。また玄関すぐ横には襖で隠してある第二の階段があり、客人への配慮として使われていたと思われる。料亭を閉めた後は住宅として使用され、現在は最小限の改修はしたものの、その趣きはそのままにゲストハウスとして再生・利活用している。静かな町で古き良き時代の空間をそのまま感じる事ができる施設となっている。

建物名称	古民家ステイ 香露軒
建築年	大正期（築約100年）
構造・様式	木造二階建
所在地	香川県仲多度郡多度津町西浜1-15
電話	090-7144-6803（おいでまい町家ﾌﾟﾛｼﾞｪｸﾄ生田様）
HP	https://koroken-tadotsu.com
開館時間	不定休 （要事前予約　１棟貸し切り宿泊、イベント貸出）
アクセス	JR多度津駅　徒歩15分

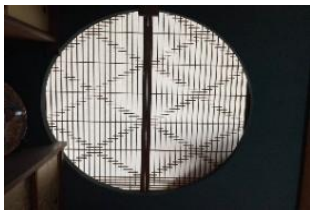
ゲストハウス花鳥苑

げすとはうすかちょうえん

香川県三豊市

外観

ゲストハウス花鳥苑は、笠田村７代目村長であった鳥取富士男氏により建てられ、会合や来客のもてなしに使われた。工期は長く大正後期に着手し創意工夫をしながら昭和前期に完成させたといわれている。
和建築でありながら、天井は高く、欄間からやわらかく光を取り入れ、客間を明るく開放的な空間にしている。また、奥には洋館が付き和洋複合型建築となっている。
拘りを感じるデザインの建具より光が差し、より一層装飾の細やかさが際立っており、見るものを喜ばせる。外周の筬欄間の上部には鏝絵が廻らされ、視覚的に間延びしないように工夫されている。
国登録有形文化財として、適切に保存修理され現在もゲストハウスとして利活用されている。ぜひ宿泊して細部の拘りを探って頂きたい。



見どころ

【展望の間】
２階廊下の突き当りには３面をガラス建具に囲われた展望の間を設け、３帖ほどの小部屋でありながら大変眺めの良い心地よい空間となっている。

【門】
左側の門は茶室に入る門で網代戸、右側の坪庭に入る門は石積みとなっている。

【床脇】

【廊下の手すり】
一枚一枚図柄が違うことに注目して欲しい。

【欄間の彫刻】※建築当初のものではない

【浴室棟】
浴室の天井は換気口をそなえた格天井で、浴槽は五右衛門風呂。現在は湯を貯めるシステムになっているが、鉄釜のまろやかな湯加減を体験することができる。
浴室横には床の間をそなえた３帖の休息の間を設けており、茶室のような趣きがある。

【客室の障子】
３方向すべて猫間障子となっている。
幅が狭いのが印象的。
どの方向も開くと庭が望める。
コーナー部に欄間を寄せているのが珍しい。

建物名称	ゲストハウス花鳥苑
建築年	昭和前期（西暦1920年代）
構造・様式	木造二階建
所在地	香川県三豊市豊中町笠田笠岡1764-1
電話	090-8285-7040
HP	https://abnb.me/vG2wwzsKbZ
開館時間	ゲストハウスとして営業中（見学･宿泊は要予約）
アクセス	さぬき豊中ICから車で約3分
備考	国登録有形文化財

三谷製糖羽根さぬき本舗

香川県東かがわ市

みたにせいとうはねさぬきほんぽ

表門（手前）と主屋（右奥）

文化元（1804）年より続く讃岐和三盆糖の製造と販売を行っている三谷製糖羽根さぬき本舗は、香川県の特産品である讃岐三白（綿・塩・砂糖）の一つである砂糖（和三盆）を製造・販売している。
江戸時代、糖蜜を抜いた白砂糖は非常に重宝され、高松藩の特産品として全国に知られるようになった。
200年以上も続く、昔ながらの手作り製法を継承する為、増改築を行ってはいるが、基本的には創業当時のままの建物と道具を使用している。
主屋は、瓦葺き木造２階建て、南北棟の切妻造りで、東面は下屋を差し掛け厨子２階風に見せ、南方は平屋建の入母屋造りとしている。

階下中央部は「製法場」という作業場となっており、天秤形状の圧搾機（国の重要有形民俗文化財にも指定されている「押し舟」）が並んでいる。
押場内の壁は土壁及び漆喰壁となっており、酵母菌が付着している為、塗替えは行われない。

見どころ

座敷を改修した土間には長石を再利用し、既存の雰囲気と調和した奥行きを感じさせる空間となっている。

建物内のランプシェードは小道具等を再活用している。
（写真左）牛の鞍を利用したランプシェード
（写真右）農具として使用していた苗籠のランプシェード

駐車場から主屋へのアプローチは、趣の異なる切石と砂利により、変化に富みながらも連続性を持たせている。
門の腰板張り上部漆喰の外観は、内部建物と統一し調和が図られている。

店舗となっている主屋の一部は、元は主人の寝泊まりの場となっていた座敷を改修した土間空間となっており、商品の展示及び接待の場としている。
押入れ部分は、建具を外し畳を敷いた飾り床とし、押入れ上部は、内にエアコンを収納し横桟の格子をはめ込んだ意匠としている。
土間の一部は小上がりとし、土間空間の単調さを和らげている。

主屋押場玄関の南に隣接する釜屋は、母屋と同じく南北棟の切妻造りで、桁行６ｍ、梁間５ｍの平屋建てである。
屋根上に煙出しの越屋根と煉瓦煙突を立ち上げた釜屋ならではの外観を呈する。
内部は、大釜３連と小釜１基の煉瓦造竈を配置している。

煉瓦造の竈

釜屋小屋組み、越屋根を眺む

建物名称	三谷製糖羽根さぬき本舗
建築年	大正　主屋の一部は1950年頃増築
構造・様式	木造瓦葺
所在地	香川県東かがわ市馬宿156-8
電話	0879-33-2224
HP	https://wasanbon.com
開館時間	9:00～18:00　（1/1～3休業）
アクセス	JR引田駅より車で5分、高松道引田ICより車で7分
備考	押場、砂糖釜屋等の建物の見学は要事前連絡 登録有形文化財（建造物）

吉田邸

よしだてい

香川県丸亀市

通りに面した外観

「重要伝統的建造物群保存地区」である笠島地区の古い町並みに建つ「吉田邸」は、塩飽大工によって大正時代に造られたおよそ築100年の邸宅である。
笠島地区には、江戸時代から戦前にかけて建てられた建物が100棟あまり残されており、通りに面して格子構えに、二階には虫籠窓を設けたツシ二階建ての町屋形式の住宅が立ち並び、間に塀を巡らせた家も点在している。吉田邸は通りに面して御影石の切石布積みの塀と蔵が印象的な建物である。

笠島地区は、瀬戸大橋の周りに点在する大小28の島々からなる塩飽諸島の中心であった塩飽本島の北東部に位置する小さな港町である。かつて本島は塩飽水軍の本拠地として栄え、江戸幕府の直轄地として自治を認められていた。塩飽の船方たちは高い技術を誇り、江戸時代中期ごろまでは御用船方として活躍し廻船業が盛んであったが、幕府の方針の変更により塩飽の廻船は衰退していった。水夫や船大工達はその技術を活かし家大工、宮大工へと転業し、塩飽大工衆として近隣諸国にその名を轟かせ、手がけた寺社仏閣などが残っている。

見どころ　～塩飽大工の技と細部までのこだわり～

【捻竿鯱】
丸太材の桁の組合わせる部分の仕口は、捻竿鯱（ひねりさおしゃち）という技法を使っており、極めて難しい宮大工の技法。

【ちり落とし】
ちり(埃)がたまりにくいように横格子をわずかに斜めに組んだ「ちり落とし」の障子

【欄間の工夫】
刀の鍔を埋めこんだ粋で珍しい欄間。
鍔の形は様々で、光が透ける様が美しい。

【目線を意識】
座った目線で目に入る足元に節が等間隔の竹材を使い仕上げている。

【客用トイレ】
便器には染付が施されている。あでやかな牡丹の花が見られる。
床は白いタイルと人研ぎ石が市松模様に貼られている。

開放的な室内

外部建具や欄間のガラスから、室内に自然光が入る。座敷に座って庭を眺めると一枚の絵のように見えるほど、視界を遮るものを極力なくしている。縁側廊下の柱は少なく、外部建具の鴨居の見付は限りなくスリムにしているにも関わらず、たわみやくるいは見られない。塩飽大工の技術の高さがうかがえる。

縁側の廊下には長さ12mもの節のない杉の丸太材が使われている。ガラスは大正時代のものがそのまま残っており、光の揺らめきが趣深い。手前の大きな岩を使ったつくばいにも驚かされる。

縁側の廊下

建物名称	吉田邸
建築年	1920(大正9)年頃
構造・様式	木造
所在地	香川県丸亀市本島町笠島314
電話	090-8692-1827 （吉田邸　吉田様）
HP	https://www.marugame-happylife.jp/islands/info/
開館時間	事前問い合わせ・要予約
アクセス	本島港から徒歩25分、レンタサイクル10分 本島へは丸亀港～本島港へフェリーで35分

塩田家ヤマサン醤油製麹長屋門及び納屋

香川県小豆郡小豆島町

しおたけやまさんしょうゆせいきくながやもんおよびなや

外観

ヤマサン醤油の醤油醸造所及び醸造所当主塩田邸の道路向いの敷地に製麹長屋門及び納屋が建つ。
道路沿いのへの字平面の平屋建納屋の東に２階建のように見える製麹長屋門が繋がる構成で、製麹長屋門の西端に間口一間半規模の門口を開ける。門口は、現在は店舗の一部に改造し、商品陳列や、茶屋として利用している。製麹長屋門の東方を麹部屋とし、南に下屋を差し掛けている。

見どころ

ヤマサン醤油は、小豆島町内最古の弘化3(1846)年から醤油醸造所として営んでいる。馬木台地を源に西流し内海湾にそそぐ馬木川沿いの北方に位置し、「醤の郷」(醤油製造所が立ち並ぶ地域）の玄関口に位置している。
その建物の中で、玄関口にある製麹長屋門及び納屋はリノベーションして現在では店舗兼茶屋として利用されている。昔は船で材木を運ぶことが困難であったため、島内にある材木を利用している。旧内海町内で利用された建物の梁や柱は、必要な旧内海町内の家・醸造所・納屋の立て直しに利用されたり、移築しながら再利用してきた。外壁は潮風(塩害)や虫害に耐えられるよう焼杉と漆喰の壁としている。麹を発酵させるためできる限り外気の影響(温湿度差)を避け窓や扉を2重にして、天井には換気口・屋根裏には空気抜きを設けている。店舗部分では、木桶を利用して小物を置き、インテリアとして活用している。

通路から店舗を望む

元麹部屋の茶屋の天井

木桶を利用した飾り棚

ヤマサン醤油正面

３階建て木造醤油蔵

木造３階建ての１階から３階まで大きな醤油樽を置き醤油醸造していた。木桶の大きさが２mと深く重量もある為、梁や柱を二重にするなど工夫がされている。梁も曲がりのある木材をそのまま利用して構造材としている。小屋組みはキングポストトラス、外壁は焼板縦張となっている。

醤油醸造場の南方住宅敷地の南編に建つ。入母屋造、本瓦葺、腰を焼杉板張、上部を黒漆喰塗とした長屋門で、東に脇門、西に茶室を繋げる。堀は、内側をコンクリート節目仕上げ、外側を縦板張とし、馬木川沿いは谷積石垣の上を源氏塀状として趣ある景観である。

塩田家住宅長屋門及び塀

建物名称	塩田家ヤマサン醤油製麹長屋門及び納屋
建築年	昭和初期
構造・様式	木造平屋
所在地	香川県小豆郡小豆島町馬木甲821-2
電話	0879-82-1014
HP	http://www.yamasanshoyu.co.jp
開館時間	店舗として営業（見学は要予約）
アクセス	土庄港から35分・池田港から車で20分
備考	国登録有形文化財37-0300　2006（平成18）年03月2日

小比賀家住宅

おびかけじゅうたく

香川県高松市

表庭より主屋をみる

小比賀家住宅は、江戸時代には、庄屋、大庄屋などの役を勤めていた屋敷である。香川県では古くからの豪族として有名で、先祖は甲斐源氏武田氏から分かれた。
約1,400坪もある広大な敷地の中央に建てられた主屋は、間口十三間半、奥行五間半という大きな建物で、17世紀前期に建てられた。
屋根は寄棟造の茅葺きで、四方に本瓦葺きの庇、棟には二間の本瓦葺きの煙出しがある。外部からの出入口は複数あり、内部は座敷上、下の両間、大玄関、小玄関の間、仏間、神の間、奥の間、居間、次の間、勘定場の床上部と広庭と呼ばれる土間部とに分かれる。

見どころ

座敷 上の間

座敷 下の間

座敷は身分が高い大切な客の来訪があったときだけ応接間として使われた。
特に「上の間」は、高松藩主とその一族の来訪を受けた時しか使わなかった特別な一室である。壁は紙張りで、大切な来客がある際は障子や襖とともに張り替えられていた。客人に対する敬意とおもてなしの心を感じられる気持ちの良い空間である。
また、座敷 下の間より、香川県指定の名勝庭園を座観するのも良い。

午門

長さ36mで、国内最大級の長屋門である。主屋からみて午の方向にあり、午門と呼ばれる。寄棟の茅葺き屋根には、約30tの茅が使われている。

庭園

主屋西側の池泉回遊式の築山庭園は、力強い石組みと「く」の字に湾曲した曲水式地割りが見られる。故重森三玲先生から絶賛をいただいた。

広庭

広庭は、向かって一番右の入口を入った土間の部分で広さは約25坪。主に来客の待合所に使われ、時には法廷の白州としても用いられた。天井の梁組みは400年前の姿が今なおそのままの形で残り、その迫力は圧巻である。

勘定場の床上げ部より座敷をみる

大玄関の間より広庭をみる

一般の来訪者が入ることができるのは、広庭までであった。大玄関の間の表に設けられた一間半の大式台の正面玄関は、高貴な来訪客の時以外は使われず、家人が使えるのも、出陣と出棺の時だけという掟のある厳しい格式をもつ玄関である。このように、出入口や各部屋の用途が来訪者の身分により分けられていた。広庭より座敷上の間へと奥の部屋へ進むにつれ、建具、畳の敷き方、釘隠しなどの細部の装飾をはじめとする室礼が変化していく様は、当時の身分社会の世相を感じられる。

小比賀家住宅は、近年、耐震補強を含めた保存修理工事が行われた際も建物に使われている部材(古材)を可能な限り再利用し、取り替える場合も古い仕様に倣うことで、建物の価値を保っている。また、歴代の当主が守り続けてきたという歴史の重みも感じられ、堂々たる風格を持つ、後世に残し伝えたい建物である。

建物名称	小比賀家住宅
建築年	江戸時代前期（西暦1601-1700年）
構造・様式	木造寄棟造　茅葺、本瓦葺
所在地	香川県高松市御厩町331
電話	087-839-2660（高松市役所文化財課）
HP	http://www.city.takamatsu.kagawa.jp/kurashi/kosodate/bunka/bunkazai/shiteibunkazai/kenzo/kohigake.html
開館時間	毎月第3日曜日　10:00～16:00
アクセス	ことでんバス　御厩線「御厩」バス停より徒歩5分
備考	国指定重要文化財

披雲閣

ひうんかく

香川県高松市

披雲閣全景

披雲閣は高松松平家十二代当主松平頼壽の別邸として築かれた。大正3（1914）年に着工、翌年に上棟し、同６（1917）年に竣工した。瀬戸内海に面しており、香川を訪れる賓客をもてなす迎賓館としての役割もあった。
披雲閣という名は、江戸時代に三ノ丸にあった御殿の呼称に由来する。
本館は、木造で、接客、居住、家政などの機能をもつ各部を渡廊下で接続しており、延床面積は1,887㎡に及ぶ。南を正面として玄関を構え、西から北へ蘇鉄の間、大書院、槇の間の各広間を並置し、北方の庭園を望む接客空間とする。玄関の北には杉の間、桐の間、松の間、藤の間が連なり、居住と宿泊に供する。玄関の北東には勝手と調理場、桐の間の東には浴室を設ける。廊下と渡廊下で囲まれた大小の中庭を配し、ゆとりのある平面を構成する。平面計画は、廊下も含めて一間六尺五寸の柱割で、一体的に設計されている。

披雲閣平面図

見どころ

大書院は、28畳３部屋が東西に並ぶ。南東北の三方に入側を廻し、さらに四周に廊下を廻らす。西面の中央に入母屋造桟瓦葺の附属屋を出し、物置と便所を設ける。
室内は、西面に床を構え、北に付書院を設ける。内法長押と蟻壁長押を廻し、入側境に障子欄間、部屋境に筬欄間を入れる。床は幅二間半、奥行一間の規模で畳敷とし框を黒漆塗で仕上げる。床脇には天袋と鳥居棚形式の違棚を配する。室内、入側とも畳敷とし、入側を含めた座敷の規模は142畳に及ぶ。天井は、室内、入側とも棹縁天井で、和風シャンデリアを備える。

大書院

各部屋から外を眺めると、ゆれる大正ガラス越しに園庭を眺めることができ、趣きがある。現在ではこのガラスを製作することが出来ないため、古い建物を解体するなどの情報を集め、使えそうな場合は、再利用しガラス修繕に充てている。
2020（令和2）年から2030年(予定)まで披雲閣耐震補強工事を各部屋について順次行っている。

大書院の北側外観と大正ガラスの障子

披雲閣は江戸時代の城内の殿舎を意識した伝統的な建物の配置や意匠を持つと共に、様々な規模、形式の座敷による充実した接客空間を擁する近代の和風住宅である。江戸時代の城跡に再建され、大正時代における大規模木造建築の技術的水準を示すものとして重要な建築物である。披雲閣の各部屋は、その部屋から見える風景などから名前が付けられている。蘇鉄の間の北側には島津家から贈られたと言われている蘇鉄が植えられている。槇の間は２階建の１階部分に位置し、12畳半２部屋が東西に並び、南北に入側を設け四周に廊下を廻らす。２階にある波の間には昭和天皇・皇后両陛下が宿泊された。第２次世界大戦後しばらくは占領軍に接収されていたが、高松市が譲り受けてからは貸会場として結婚式、会議、茶会、華展などに利用されている。

槇の間（１階）

外観 波の間（２階）

建物名称	披雲閣
建築年	1917（大正6）年
構造・様式	木造平屋一部二階建
所在地	香川県高松市玉藻町2-1
電話	087-851-1521（玉藻公園管理事務所）
HP	http://www.takamatsujyo.com/
開館時間	普段は外観のみ 貸館のため一般公開は、1/1～３及び5/5のみ
アクセス	ＪＲ高松駅より徒歩５分
備考	国指定重要文化財2030年まで耐震補強工事による利用制限あり

林求馬邸

はやしもとめてい

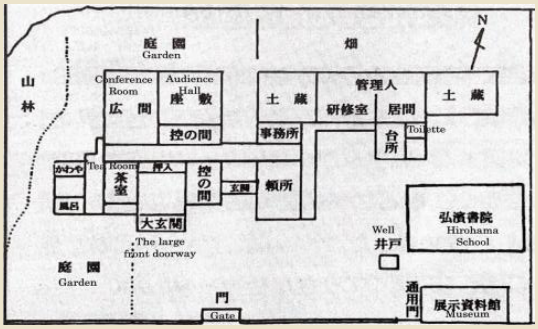
香川県仲多度郡多度津町

外観／大玄関

林求馬邸は、1867（慶応3）年に建てられた武家屋敷である。
当時の多度津京極藩（１万石）の殿様は多度津陣屋（現在の家中）の藩邸に住んでいた。
第６代の京極高典のとき、有事の藩主避難所として国家老の林求馬が別邸として築いたのが当家老屋敷である。有事とは、多度津藩の藩邸が海に面するので、外国船の攻撃を受ける懸念である。その動機は、求馬が「安政元年、神奈川沖で米艦をみる」とあり、日米和親条約締結のために二度目の来日をしたM.ペリー提督率いる美國海軍東印度艦隊、所謂「黒船」であり、９船の大艦隊を見たことだった。瀬戸内海の長閑な帆船を見慣れた求馬にとって、さぞかし脅威であったと思われる。
第8代の林求馬時萬（ときかず）は、風雲急を告げる時代背景を反映してか頻繁に改名しており、林求馬邸が建てられた時点では「林三左衛門時萬」と名乗っていたが、現在も地元では「林求馬邸」として通っている。

見どころ

【山に囲まれた立地】
防衛のための立地であり、北庭は山を借景したつくりとなっている。



【間取り図】
明治時代以前に建築されたものとしては珍しい建物の東西方向に抜ける中廊下がある。
【林家の収集品】
書や絵画等の美術品からも当時の様子が覗える。

【頼所】
頼所の2階窓は来訪者を確認する見張り用である。武家屋敷としての機能が見られる。

内観／座敷

内部構造は客間、奥座敷、居間等一つ一つの建屋を独立させる寝殿造とは異なり、ひとつの主屋の中で互いに連絡させる書院造となっている。
各部屋は大玄関右側六畳と廊下を挟んで北側の六畳を家臣の控えの間、大玄関左側は茶室となり、その北側十四畳は、藩主に対面、または会議を行う場である広間である。そしてその右側六畳は藩主の御成間となっており、座敷と呼ばれている。また各部屋の欄間は透彫、天井は格天井で、家老格以上が居住する座敷の様相を呈している。
外部構造としては玄関の屋根数棟が「かま型」に連接し、その正面は本瓦葺の入母屋造となっている。正面にある大玄関は、御成玄関として、藩主が訪れた時のみ使用する。それ以外の家臣は、小玄関（たのもう玄関）より出入りする。玄関の棟木の下には「慶応三卯年六月林家繁栄億萬歳　四方潔界宝牘嵯峨法泉院」とあり、これは林家の繁栄が永く続くことを祈念するため、嵯峨の法泉院という寺院の宝牘（木製又は竹製の護符や御札）を建物の四隅に配置し、邪気を払う結界を張っていることが書かれている。

建物名称	林求馬邸
建築年	1867（慶応3）年
構造・様式	木造本瓦葺・書院造
所在地	香川県仲多度郡多度津町大字奥白方698
電話	0877-33-3884
HP	https://www.town.tadotsu.kagawa.jp/kanko_bunka_event/rekishi_bunka/1884.html
開館時間	毎月第1日曜日　9:00～15:00
アクセス	JR海岸寺駅出口から徒歩約25分
備考	多度津町指定文化財

讃州 井筒屋敷

さんしゅう いづつやしき

香川県東かがわ市

東かがわ市引田にある井筒屋（現在の井筒屋敷）は引田御三家の一つで、江戸時代から地主や商家として栄えた旧家である。
1987（昭和62）年以降、住む人がいなくなり、荒れ放題になっていたが、地元有志の熱意で自治体による改修が行われ、2005（平成17）年に一般公開された。

見どころ

①庭

東及び北の塀は柴垣（しばがき）、南側は網代組（あじろぐみ）で土塀が美しく化粧されている。奥屋敷の軒先のすばらしい手水鉢（ちょうずばち）、橋杭型燈篭（はしくいがたとうろう）など、いろいろな形の石燈篭が数多くまた、きわめて大きい飛石が置かれている。

②奥座敷

西側が中座敷、東側が上座敷と呼びお客様をお通しする部屋だった。南の障子を開けると「御成門」が見える。高貴な方は、御成門から直接この座敷にお上がりになった。そのため、この部屋は南北両方に庭が見える屋敷で一番よい部屋となっている。
天井の高さは９尺３寸（約３ｍ６０ｃｍ）と当時の住宅に比べてとても高くなっている。
床の間は、畳敷き、壁には和紙が使われている。また座敷の廊下も畳敷きになっている。このことから、この座敷はとても格が高い場所であったことが窺える。

くぐり戸付二枚折り大戸のある玄関を入ると八畳二間つづきの大きな帳場がある。
左手前に筒形の橋杭形手水鉢（はしくいがたちょうずばち）、その向こう右に柱状の柱梁形燈篭（ちゅうりょうがたとうろう）が見える。
「橋」をテーマにした庭である。
帳場を通り庭に近づくと、表門、左手に奥屋敷が見える。

広大な敷地の中心に庭と茶室がある。
母屋から欄干のある渡り廊下を進むと茶室がある。
茶室を囲む廊下の欄間は松竹梅のデザインが施されている。
柱にはヒノキや松のシャレ木、ヒバのあて丸太など異なる種類の木材が使用されている。天井には北山杉の小丸太とクリのなぐりが交互に施工されている。

建物名称	讃州 井筒屋敷
建築年	江戸後期から明治期
構造・様式	木造、入母屋造り
所在地	香川県東かがわ市引田2163
電話	0879-23-8550
HP	https://higashikagawa.net/sightseeing/idutsuyashiki
開館時間	10:00～16:00（母屋） 定休日水曜日（祝日の場合は営業）
アクセス	引田ＩＣより車で約10分
備考	

郷屋敷（旧井上家住宅）

香川県高松市

ごうやしき（きゅういのうえけじゅうたく）

井上家は江戸時代中期からの旧家で代々農業を営むうちに信望を得るようになり、４代目半三郎義勝が与力の職を任ぜられ、行政、司法、警護の任に当たり地域の発展に貢献してきた。以来周辺の人から「与力屋敷」として親しまれてきた。現在は、精粋讃岐料理に手打ち讃岐うどんを加えた料理店「郷屋敷」として活用され、美しい庭園を眺めながら四季の美味を楽しむことができる。
中央の表門を潜ると枯山水の立派な前庭が広がり、屋敷のほぼ中央に主屋が建っている。当地方で一般的な寄棟造の４周に瓦葺の庇を付けた外観であり、規模は雄大である。
主屋の北側の中庭を挟んで離座敷が廊下で繋がれている。北東隅の湯殿（現在は客間）も廊下と繋がって建っている。
敷地内には６棟の蔵があり喫茶室、待合所や食品庫などに使用され、蔵の顔や姿を変えずに上手に使われている。

左／表門を挟んで東側に米蔵、西側に蔵がある。
西側の蔵は南面の腰が簓子下見板張、北面は真壁造となっている。通りに面する窓に格子を入れるなど長屋門風の外観とするのは珍しい。

見どころ

主屋は中央に敷かれたタタミ廊下の両側に、４室ずつ合計８室の部屋がある。一番奥の部屋を上座敷と呼び豪華な装いが凝らされ、数寄屋風の書院や七宝くずしの欄間など、繊細で緻密な意匠のものがはめ込まれている。また、梁から垣間見えるよくいぶされた茅葺きの天井も見応えがある。

上座敷

中庭が望める客間

釘隠

各部屋で装飾が異なる欄間

茅葺の小屋組

前庭から見た主屋

なまこ壁

左／米蔵は腰をなまこ壁とし、上部を白漆喰塗としている。平面は平行四辺形となっており、これにあわせて柱を菱形につくるなど、手の込んだ造になっている。

離座敷

奥庭

建物名称	郷屋敷（旧井上家住宅）
建築年	1868（明治元）年
構造・様式	木造平屋建、瓦葺
所在地	香川県高松市牟礼町大町1987
電話	087-845-9211
HP	https://goyashiki.co.jp
開館時間	11:00～15:00・17:30～21:00、土日祝11:00～21:00
アクセス	高松中央ICから車15分、駐車場有
備考	国登録有形文化財37-0060～0074号

常信寺庫裏

じょうしんじくり

愛媛県松山市

道後温泉本館にも程近い常信寺（天台宗）は、松山藩主初代松平定行が松山城の鬼門守護のため
東京上野寛永寺になぞらえて、天海僧正弟子憲海を開山として1650（慶安3）年に建てたものである。

北側座敷

北側座敷

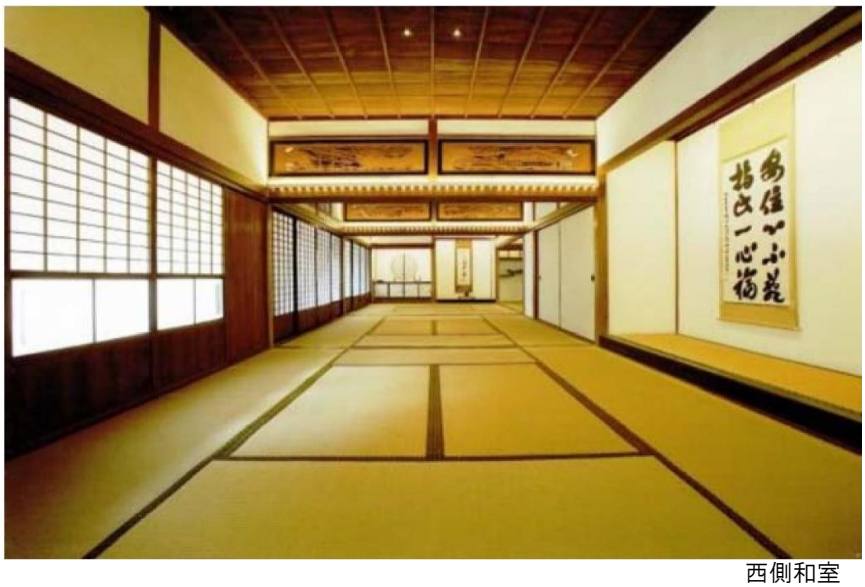
見どころ

本堂、庫裏、元三太子堂、観音堂、鐘楼などの建物が建ち並び、寺院としての佇まいを見せている。
桜の時期は特に素晴らしく、俳句の吟行で訪れる人も多い隠れた古刹である。

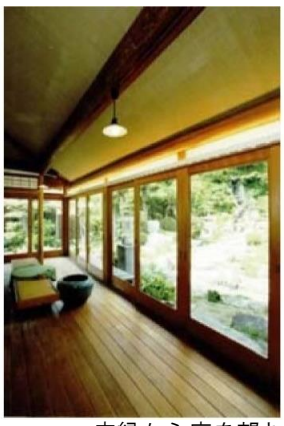
境内の東に位置する庫裏の屋根は南北軸の寄棟で、どっしりとした風格を感じられる建物である。
内部は北側に続きの座敷があり、西側には玄関を中心とした和室が続く。
東側はプライベートな空間となっている。和室は連続した大空間にもなるが、区切っても使える工夫がしてある。
長押の上や床の間に間接照明を設け、柔らかな和の空間を演出している。

境内には松平定行公の霊廟（県指定史跡）がある。本瓦葺きの入母屋造り妻入りの建物で、唐破風をもつ江戸時代初期の代表的な霊廟建築である。
その東隣にひっそりと建つ、弟定政公の霊廟（県指定史跡）と共に藩政時代の松山藩を物語る貴重な遺構といえる。

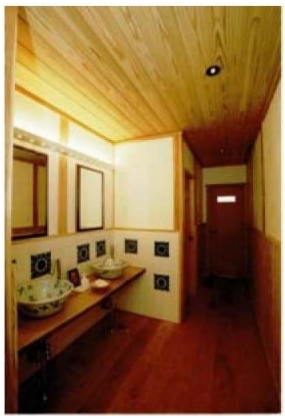
庫裏全景



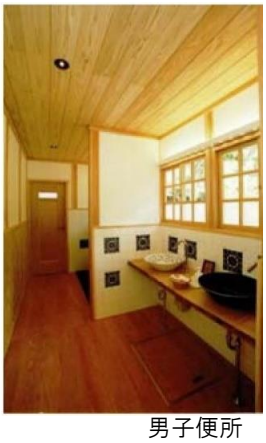
西側和室



広縁から庭を望む



女子便所



男子便所

建物名称	常信寺庫裏
建築年	明治後期
構造・様式	木造　桟瓦葺き　（285㎡）
所在地	愛媛県松山市祝谷東町636
電話	089-943-5623
HP	―
開館時間	問い合わせ必要
アクセス	伊予鉄道市内電車道後温泉駅徒歩10分駐車場有
備考	

古今荘

ここんそう

愛媛県四国中央市

上之間

この建物は、創建時代や来歴は不明だが、旧小松藩の萩生村（現在の新居浜市中萩）庄屋飯尾家の屋敷から明治30（1897）年頃現在地に移築されたものと伝承されている。

現在は地元の製紙会社の別邸となっている。
先代社長が戦後間もなく購入された後は、ご親族の結婚式や銀婚式などの慶賀の会に使用されただけだった。

経年劣化による雨漏りなども進行し、傷みが激しかったが、平成11（1999）年に屋根の全面葺き替え等、原型をとどめる形で補修された。
近代的な建物に建て替える計画もあったそうだが、地方の貴重な文化遺産でもある和風建築を残そうとの意志で保存された。

見どころ

建物は平屋建て、入母屋造妻入りで、玄関式台部分にむくり破風の屋根がかけられている。

間取りは、北側の玄関式台から「三之間」（10帖）に入ると「次之間」（10帖）、「上之間」（15帖）と二間藩の間口で一列に三室が並んでいる。

三室はそれぞれ床の間を持っている。
三之間は床の間のみで、床板には見事な栂の一枚板が使われている。
上之間は本格的な床の間で、床脇は北端に地袋のみで、床板には松の鏡板が張られている。床の間は框が漆塗りの畳床で、栂無節の四方柾の床柱は建物全体のレベルを象徴するかのような逸品である。
次の間の床脇は天袋と地袋のみで、地板を張らず畳敷きとなっている。

建具や欄間、その他細部の意匠や納まりにも携わった大工の丁寧かつ精緻な仕事がうかがえ、建築技術の高さを物語っている。

また、移築時にみられがちな傷や痕跡の埋め木などがほとんど見られず、見えがかり部分の仕口等にも隙間がほとんど見当たらない事からも、精緻な仕事ぶりがうかがえる。

三室を望む

次之間

障子

違い棚

欄間

欄間

建物名称	古今荘
建築年	明治初期
構造・様式	木造　入母屋造妻入（218㎡）
所在地	愛媛県四国中央市上分町601-2
電話	0896-57-2200
HP	―
開館時間	問い合わせによる
アクセス	JR川之江
備考	駅徒歩20分　三島川之江ICから約3km 国指定登録有形文化財　2005（平成17）年登録

木屋旅館

きやりょかん

愛媛県宇和島市

夜外観

木屋徳右衛門の二代目木屋徳三郎が明治44（1911）年堀端通りの現在地に商人宿として旅館「木屋」を開業

当時の宇和島は、明治以後急速な産業、文化の発展に伴い、追手町通りや袋町を中心に繁華街が形成され、「融通座」という芝居小屋が追手町通りにあり、商業客はもとより役者や歌手などの芸人も多く宿泊した。

所在地の堀端通りは、宇和島城の堀が埋め立てられた土地で、すぐ近くに追手門（国宝、戦災で焼失）があったが、現在は大きな石碑のみ残っている。

夜外観

見どころ

この旅館は木造二階建、切妻造り、平入り、桟掛け瓦葺き延べ面積559㎡（169坪）の、つし造りである。
正面から見る外観は、１階は連子格子窓と犬矢来と、２階は硝子窓が連なり、風情のある佇まいを醸し出している。創建当時の写真には、建物の前に小川が流れ、その前には柳の木がある独特な風景が写っている。

客用玄関前の軒先には、創建当時の門灯が残っている。玄関を入ると取り次ぎの板間になる。板間横には、客間として和室８帖２部屋と４帖１部屋がある。３部屋共床の間の構えがあり、会議室や宴の部屋に使われている。この客間と板の間からも中庭と宇和島城が見える空間になっている。

主として１階は旅館に必要な機能を備えた部屋を配置している。調理室、風呂場、ボイラー室等がある。
また、１階部分に車庫があるが、創建当時は人力車置き場であった。従業員が使用していた玄関には、宴が盛り上がり旅館に泊まったお客が、早朝人力車に乗るため用の小さな板戸があり、現在も残っている。

２階の間取りは、表通りに面して縁を設け、客室には８名まで宿泊できるようになっている。客室の前に廊下、その外にも廊下が二重に設けられて掃き出しの硝子窓となっている。創建当時は建具は無く、雨戸のみとなっていた。外側の天井は主屋根の勾配で、その部分のみ天井が低く、屋根は銅板一文字葺である。

２階北面端にある部屋は、常連客の司馬遼太郎が宿泊する時に使用された部屋が今も残っている。
この部屋からも城山や１階の中庭も望められる造りで、北面壁には、茶事に使われる小さな花瓶掛け用の沈め釘や床板に類する構えも残されている。

表の外観は創建当時の景観が残されており、宿泊客や市民に慕われる建物になっている。

玄関ホール

夜外観

２階廊下

客間

客間

客間

建物名称	木屋旅館
建築年	1911（明治44）年
構造・様式	木造二階建　土葺　（559㎡）
所在地	愛媛県宇和島市本町追手2-8-2
電話	0895-22-0101
HP	http://kiyaryokan.com/top/
開館時間	問い合わせによる
アクセス	JR宇和島駅徒歩15分
備考	国登録有形文化財（建造物）2014（平成26）年指定

菊池清治邸

きくちせいじてい

愛媛県八幡浜市

菊池清治家は当地の発展に大きく寄与した商家である。
木格子の店構えの外観は海運で栄え伊予の大阪と称された当時のまちの面影をしのばせる。

店舗棟

住宅棟

見どころ

菊池家は、江戸期以降、木蝋、海運その他の業容を拡大。歴代当主には、幕末期に活躍し内海貿易で財を成し、明治に入り八幡浜銀行を設立した４代清治正明、東京帝国大学を卒業、広島高等学校校長・松山高等学校学長などを歴任し、八幡浜市長として市政の舵取りをした７代清治（名誉市民）などがいる。

建物は通りから見て店舗棟と右側の住居棟の２棟で構成され、漆喰塗りの白壁に店舗棟１階軒下に４枚、住居棟に２枚計６枚の彫刻を施した欅材の持ち送りが並ぶ。

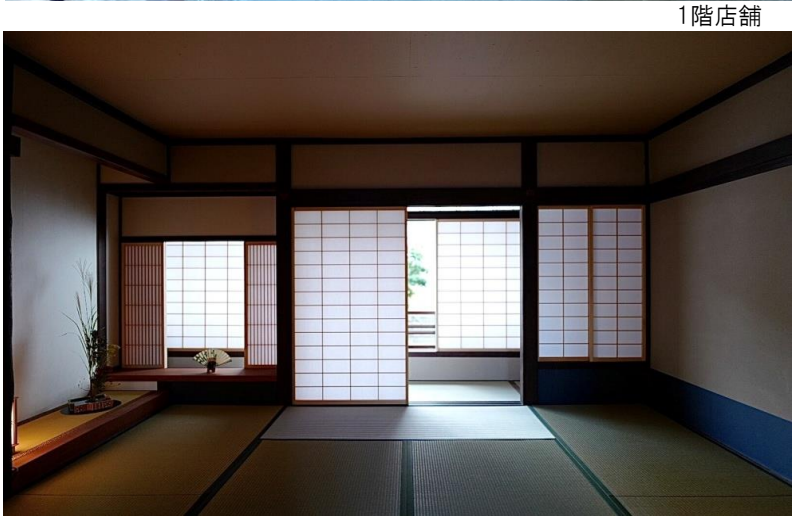
店舗棟の大黒柱は欅、土間に面した上がり框は桜材、2階は柱や長押に栂材、2階座敷の天井と壁の下部を和紙貼りとするなど、趣向を凝らしながら全体としては質実な家風を感じさせる。

庭のドングラ（道具蔵）では、日本最古級の木製三輪自転車が発見されており、現在大阪の自転車博物館サイクルセンターで保管展示されている。

平成29（2017）年4月19日に、八幡浜市有形文化財に指定されている。

木製三輪自転車の1/2レプリカ展示中

1階店舗



２階和室

建物名称	菊池清治邸
建築年	1873（明治6）年3月14日築
構造・様式	木造　本瓦葺（307.78㎡）
所在地	愛媛県八幡浜市浜之町183
電話	0894-21-3335
HP	―
開館時間	10:00～16:00　第2日曜日
アクセス	駐車場は八幡浜市民文化活動センター駐車場利用 八幡浜市民文化活動センターから徒歩5分
備考	市指定有形文化財

西条栄光教会牧師館

さいじょうえいこうきょうかいぼくしかん

愛媛県西条市

お堀からの眺め

西条栄光教会の建築群は江戸時代初期に築かれた西条藩陣屋跡のお堀の内側に建っている。

白い礼拝堂が北東の堀端に、南側に牧師館、西側に幼稚園があり、それぞれが切妻の瓦屋根によって統一され、三棟が渡り廊下で繋がり園庭を囲むように群を成してお堀とともに調和して佇んでいる。

牧師館・礼拝堂・幼稚園から成る建築群

見どころ

西条栄光教会牧師館は、北側に建つ礼拝堂に合わせるように高さを抑えた日本瓦の切妻屋根と1階を杉板、2階を漆喰壁の真壁とした民藝風の意匠で、お堀の情緒にあった景観を作り出している。大屋根としたことで、床の段差や吹抜などが立体的になり豊かな内部空間となっている。建築当時は、信者の集会と牧師の生活といった公私の用途を併せ持ち、回遊性がありながら階段や便所を２つ設ける事で動線が交わらないようにゆるやかに分節された巧みな計画となっている。

西条栄光教会は、倉敷レイヨン西条工場の数名の青年男女の聖書研究会から始まった。昭和25（1950）年、教会建設を決議。建設資金は募金や献金、バザーなどで集めた。また当時の倉敷レイヨン大原總一郎社長の多額の寄付によって建設が実現するに至った。翌年、本社営繕部長の浦辺鎮太郎の設計において教会建設が始まった。

建築家浦辺鎮太郎は、京都帝国大学建築学科でフランクロイドライトの高弟である遠藤新に指示し影響を受ける。倉敷レイヨン入社後は、営繕部門で大原社長の構想するまちづくりを支え、倉敷市に多くの作品を残している。（倉敷国際ホテル、倉敷アイビースクエア等）
西条栄光教会と同じお堀の中に建つ西条郷土博物館や愛媛民藝館も浦辺の設計によるものである。

西条栄光教会建築群は平成27（2015）年に保存再生調査を開始した。その結果、最も危険な状態の結果が判明した牧師館の改修計画を翌年始動。予算不足による分離発注やＤＩＹ等も行ないながら１年半の工事を終えた。改修計画では、文化財として当時の姿に戻すのではなく、時を経て改変された部分を受け入れ今後も使い続ける事をテーマとしている。

改修マップ

南側外観

北東側（礼拝堂への渡り廊下）

客間.1（旧YMCA相談所）

玄関・プライベート側階段

室.1（旧集会室）

客間.2（旧来客用寝室）

all photo©北村徹

建物名称	西条栄光教会牧師館
建築年	1951（昭和26）年
構造・様式	木造二階建
所在地	愛媛県西条市明屋敷236-17
電話	0897-56-2711
HP	―
開館時間	問い合わせによる
アクセス	JR伊予西条駅から約2.4km　いよ西条ICから約7km
備考	国登録有形文化財　2021（令和3）年指定

八木商店本店資料館

やぎしょうてんほんてんしりょうかん

愛媛県今治市

「八木商店本店」は今治の実業家・八木亀三郎（1863-1938）が大正5（1916）年から７年にかけて建てた「八木商店」の店舗兼住宅。八木亀三郎は海運業・製塩業を生業とし、息子の實通(まさやす)とともにわが国の北洋漁業の先駆者でも知られる。

総敷地面積1,276坪（裏山回遊式庭園含む）、屋敷は床面積238坪。「モダンなデザインの内装の一方、耐震性や湿気対策に配慮された近代和風建築の好例」と高い評価を得ている。棟梁の津川喜一郎は、八木家のお抱え大工で、ロシアで洋風建築学を学んだとされる。

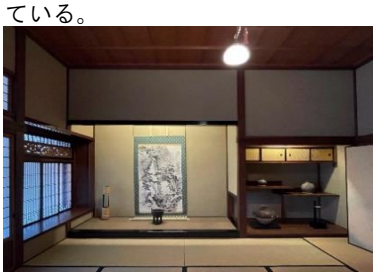
現在は藤高興産株式会社の所有・管理で、平成30（2018）年から藤高グループの私設資料館「八木商店本店資料館」として一般に公開されている。

見どころ

この建物は、玄関のある店舗棟、居住棟、座敷棟の３棟で主に構成されており、それらを廊下でつないでいる。その他に内蔵や離れも併設されている。
廊下に使用されている45枚のガラス戸は、大正時代の吹きガラスを用いている。廊下の柱はツガ材、床板はツガ材の柾目を使用しており、座敷棟の廊下は二重廊下となっている。この他にも杉の梁材、虎杢のトチ一枚板の扉、ケヤキ玉杢材を用いた付書院等、建物の随所に上質な木材が使用されている。

座敷棟の大広間の襖や板戸には横山大観の愛弟子・大智勝観（今治市出身）の日本画が描かれている。

中庭には、蟹工船が樺太からバラスト代わりに持ち帰った巨石のほか、京都の鞍馬石を用いた飛び石などがある。



座敷棟の床の間

居住棟の床の間

寵愛する孫娘の千菊にちなんだ菊模様の襖柄・引手・欄間透彫

コウモリを模った透かし

珍しい扇垂木

裏山の回遊式庭園からの眺め

建物名称	八木商店本店資料館
建築年	1918（大正7）年
構造・様式	木造二階建
所在地	愛媛県今治市波止浜2-406-1
電話	0898-41-5101
HP	https://yagishoten-honten.jp/
開館時間	令和4年6月現在休館中 再開時期についてはHPをご確認ください
アクセス	JR今治駅より車で10分、駐車場有
備考	国登録有形文化財　2021（令和3）年登録

岡御殿

おかごてん

高知県安芸郡田野町

岡御殿　外観

岡御殿のある田野は藩政期中頃、「田野千軒ヶ浦」と呼ばれ、田野五人衆をはじめとする豪商が軒を並べ、薪炭、酒、塩などや魚梁瀬美林の木材の集散地として繁栄していた。所有者の岡家は、豪商の筆頭格で土佐藩の財政のため御用金を献上したため、五人扶持、名字帯刀御免、独礼御目見得などの特権が与えられていた。岡家は米屋と号し、祖先岡氏は泉州から山内候に従って田野に来たと伝えられている。
藩主の本陣(宿泊所)として建てられたこの書院造りの建物は、上段の間に近侍の間が並び、その外に一間の次の間が廻って、その外側に三尺の廻廊と切縁がある。そして湯殿(ゆどの)や砂雪隠(せっちん)、家具に至るまで完全に保存されており、当時の建築様式が残されている貴重な遺構といえる。
また上段の間に面した広い庭には何とも趣のある趣向が凝らされた青龍姥目樫（せいりゅううばめがし）という、枝をぐねぐねさせた五本の姥目樫を一匹の龍にみたてたしつらえを楽しむことができる。

見どころ

岡御殿は天保15（1844）年に建築され、平成9（1997）年に修復工事が行われた。八畳の上段の間を中心に鞘（さや）の間、湯殿（ゆどの）、砂雪隠（せっちん）などがあり、当時の本陣の様子がよく理解できる。
特に上段の間は身分の違いを表現するために他の間より床が一段高くしつらえられ、藩主が座る位置から庭を望むと、座敷や縁の柱がピタリと一本に重なり、最も美しい庭の眺めを望むことができる。

上段の間から庭を望む

優美なこけら葺き屋根に加え、軒下を覗くと化粧の扇垂木が軒下空間に格式高い印象を与えている。
また三尺の廻廊によって奥行きのある贅沢な空間のしつらえを感じることができる。

扇垂木

廻廊

【　上段の間　】
上段の間には付け書院と違い棚があり、壁は貼り付け壁(土壁の上に紋様を刷り上げた和紙を袋貼りにした襖の様なパネルを入れた二重壁)で、さらにその周囲に黒漆塗りの四分一(しぶいち)とよぶ木製の細枠が回されている。格子欄間も繊細な造りで、また長押の釘隠しも銅板を一つ一つ彫金した優美な装飾となっている。

違い棚と貼り付け壁

格子欄間

釘隠し

建物名称	岡御殿
建築年	1844（天保15）年　修復1997（平成9）年
構造・様式	木造平屋　書院造り　入母屋造り　こけら葺き
所在地	高知県安芸郡田野町2147-1
電話	0887-38-3385
HP	https://tanocho.jp/tourism/tourism-551
開館時間	9:00～16:30
休館日	火曜日、祝祭日はその翌日、年末年始
アクセス	土佐くろしお鉄道田野駅～徒歩約7分·南国ICから約1時間
備考	県指定有形文化財　1985(昭和60)年4月2日指定

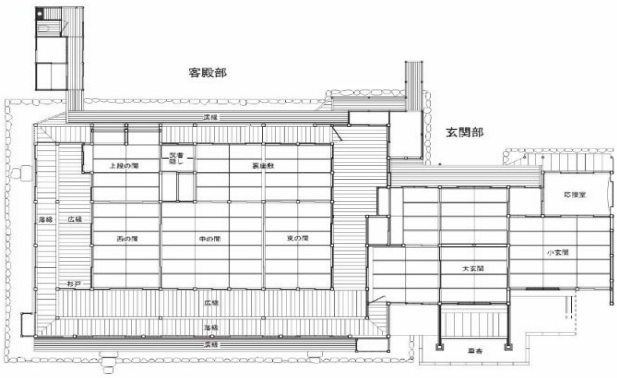
竹林寺書院（客殿）・庭園

高知県高知市

ちくりんじしょいん（きゃくでん）・ていえん

書院　西庭より庇を見上げる

高知市の南方五台山上に在する竹林寺は、四国八十八カ所霊場第三十一番目に数えられる信仰の地である。本堂は当地方の中世折衷様建築の代表事例として国の重要文化財に指定されている。
書院は竹林寺の山門北側に位置しており、高知県下を代表する大規模客殿として、2016（平成28）年に国の重要文化財に指定されている。



書院　平面図

見どころ

1816（文化13）年建築当初の姿を保つ竹林寺書院は、正統的な書院建築の形式を遵守しており、当地方においては江戸時代後期の建築物としては稀有な存在といえる。これは藩主山内家の祈願寺として火災後の復興にあたったためとみられる。高知城本丸御殿を模したと見られる意匠があること、また玄関や書院大棟に山内家の家紋があることもそれを裏づけるものである。

玄関上部、襖引手等に柏三つの家紋が確認できる

欄間には家紋の柏をモチーフにしたものが見られる

書院内部から見る庭園は、建物の規模をさらに大きく感じさせる。傾斜面を利用した庭園は一枚の絵画のようでもある。視点や場所を変え、「見え方」を変えると、また違った趣きを感じることが出来る。座位や起立、構造部材越しと、楽しみ方は多くある。

書院内部から北庭を望む

【　書院　】
書院は、寺蔵文書である「災害後金色院記」によれば、1808（文化5）年に焼失し、1816（文化13）年に再興されたとある。
建物は南面して建ち、東側の玄関部と西側の客殿部で構成される。
玄関部は、桁行12.8m、梁間7.9m、切妻造、銅板葺、正面に車寄せ付きの式台玄関をもち、車寄せは向唐破風造、銅板葺とする。
客殿部は、桁行20.2m、梁間14.3m、一重、入母屋造、銅板葺である。
濡縁および雨戸仕舞に若干の改造がみられるものの、間取りはほぼ当時の姿を保っている。

【　庭園　】
庭園は書院の周辺に展開し、大きく三つの部分より構成される。
第一は書院に南面し、前庭を成す区域である。
第二は書院の西南面から西面にかけての区域、第三は書院の西面及び北面にかけての区域で、ともに竹林寺庭園の主たる部分を成す。背後に迫る傾斜面とその前面のわずかな平坦地を利用して造られ、平坦地には傾斜面とその裾部から湧き出る希少な水を集めて池が掘られている。特に西庭では、護岸を石段状の直線的意匠とすることにより水面を軒先近くにまで引き寄せ、狭隘な水面に広がりを持たせている。
庭園は史跡名勝天然記念物に指定されており、また建物と一体になることで高い価値をもつものといえる。

南庭から書院を眺める

建物名称	竹林寺書院（客殿）・庭園
建築年	1816（文化13）年再興
構造・様式	木造平屋建・入母屋造など
所在地	高知県高知市五台山3577
電話	088-882-3085
HP	http://www.chikurinji.com/
開館時間	8:30～17:00
アクセス	高知駅からMY遊バスで26分
備考	書院：国重要文化財 庭園：国史跡名勝天然記念物

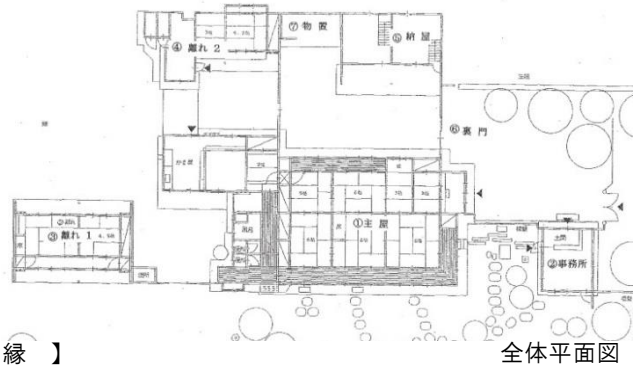
五藤家住宅主屋

ごとうけじゅうたくしゅおく

高知県安芸市

主屋を南側庭園から望む

五藤家は、尾張黒田（愛知県一宮市）の出身で、山内一豊の先代の時代から家臣として仕えた。関ヶ原の戦いの後、一豊と共に土佐へ入国。安芸城を預けられ、高知県安芸市土居に居を構えた。江戸時代には土居（土塁）内に家老屋敷が幾棟も建っていたが、1869（明治2）年にすべて取り壊された。
現在の五藤家住宅は1887（明治20）年代以降に、別邸として土居跡に建てられたものである。南の座敷3間を取り巻くように、東から南へ廻り縁があり、庭を見渡すことができる。



全体平面図

見どころ

多種にわたる境界塀

▼G.L

6畳＋8畳の座敷には、質素に見える欄間があるが、よく見ると1間1枚の板を切り抜いたもので、細かい細工が施されている。また、天井は高いが質素に徹した武家屋敷らしく「雲長押」が設けられていない。
この座敷は、申し込みをすれば有料で借りることができ、会議やイベント会場などに活用されている。

職人の技が光る欄間

●注目！！遊び心あるディテール●

玄関横にある金庫ダイアルは「いろは」

離れへ通じる廊下のドアノブ座金が桜の形

2012（平成24）年、五藤家安芸屋敷を中心に安芸市土居廓中が国の重要伝統的建造物群保存地区に選定された。この武家屋敷群の特徴は生垣や石垣、瓦積みなどによる塀の造りに依るところが大きい。特にウバメ樫や土用竹の生垣は、土佐では武家のみに許されていたといわれている。五藤家を訪れる際は、まちなみの散策も欠かせない。

【　廻り縁　】

1本の丸太桁で組まれている。建具はすべて木製で透明の磨きガラスを携えている。（数枚は損傷しており、入れ替え済み）

廻り縁天井を見上げる

廻り縁からの庭

【　玄関　】

明治になってから建替えられたが、その様は「武家屋敷」らしく質素である。
その中で、玄関間にある杉戸には立派な馬の絵が描かれており、質実剛健の中で際立つ装いである。

立派な馬の絵が楽しめる

【　台所　】

1898（明治31）年に増築された台所は、土間やダイドコロが当時のまま残されており、その時代の生活様式がうかがえる。

歴史を感じる土間

年代物のダイドコロ

建物名称	五藤家住宅主屋
建築年	1896（明治29）年
構造・様式	木造（寄棟）平屋建　武家屋敷
所在地	高知県安芸市土居955
電話	0887-34-3706（安芸市立歴史民俗資料館）
HP	https://www.city.aki.kochi.jp/rekimin/（上記資料館）
開館時間	9:00～16:00（土曜日、日曜日、祝日のみ）
アクセス	土佐くろしお鉄道安芸駅～ﾀｸｼｰで5分、南国IC～約50分
備考	国登録有形文化財　2008（平成20）年指定

土佐山田の舎

とさやまだのや

高知県香美市

通り土間

【貫通するブロック塀】
元々商店であった１階の中央に、柱と柱を縫うよう貫入するコンクリートブロック塀は、パースペクティブの効いた通り土間をつくり、建物奥へと視線を誘う。

＊撮影：西森秀一

見どころ

最初の改修が行われた1990（平成2）年は、バブル景気の末期であり、民家再生の仕事はまだ少ない時期であった。古い建物を改修する場合、新しく追加する材も古色に塗っていたが、ここではあえて、新しい材はそのままの色とし、古い材に対峙させている。歴史と現代の融合を試みる中で、建物を貫通する「コンクリートブロック土佐漆喰かまぼこ目地仕上げ」が誕生した。後に増築した渡り廊下は、タテハゼ葺きの屋根にいぶしの丸瓦を被せており、和の景観になじみつつ軽やかなデザインとなっている。

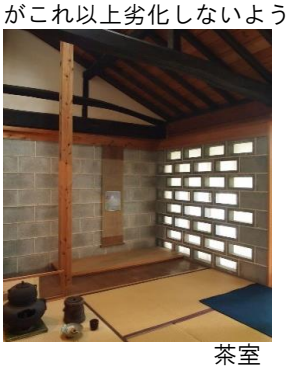
コンクリートブロック土佐漆喰かまぼこ目地仕上げ

聖瓦棒葺き＊

土佐山田の舎は、再生した古民家と増築したギャラリー、それを結ぶ渡り廊下で構成されている。建物は、大きく二度の改修を経ており、設計者はそれぞれ再生、再々生と呼んでいる。一度目の再生は、1896（明治29）年建築の町屋を、1990（平成2）年に設計事務所兼ギャラリーへと改修したもの。2000（平成12）年には国の登録有形文化財に指定された。2002（平成14）年の再々生では、古民家の裏手にギャラリー棟を増築し、現在の骨格となった。その後も外観を変えない程度に、小さな改修を重ねながら、建物を活用している。

北側外観

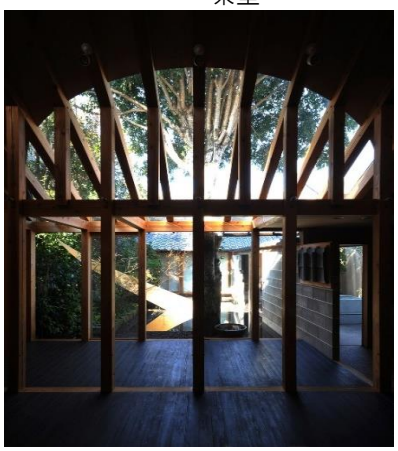
【　外観　】
原型は、つし２階の一般的な町屋(商家)のつくりであったが、再生にあたり、車寄せのために道路側の下屋を撤去している。また、構造体がこれ以上劣化しないように、木製ガラス建具で保護している。



茶室

【　茶室　】
コンクリートブロックの部屋内側は、床の間付き４畳半の現代的な茶室となっている。押入の柿渋紙張り襖は年月を経て、皮革のような趣を出している。

【ギャラリー樹下の舎（こしたのや）】
一度目の再生により生まれたギャラリーの拡大が望まれたため、再々生として、樹齢100年超の金木犀の樹の下に、ギャラリー空間を増築し、渡り廊下でつないだ。



ギャラリー樹下の舎＊

渡り廊下＊

建物名称	土佐山田の舎
建築年	1896（明治29）年 改修　1990（平成2）年、2002（平成14）年
構造・様式	木造二階建・つし二階＋木造平屋
所在地	高知県香美市土佐山田町東本町5-2-11
電話	0887-52-5104（聖建築研究所）
HP	https://hijiri-archi.com
開館時間	10:00～17:00（土日：事前予約制）
アクセス	JR土佐山田駅徒歩7分　駐車場有
備考	登録有形文化財　2000（平成12）年9月指定 木の建築フォラム・木の建築大賞（平成18年受賞）